新桑名市誕生10周年記念シンポジウム

# 「戦国・織豊期@桑名」

## 〈資料集〉

平成26年12月７日

桑名市・桑名市教育委員会・㈶自治総合センター

新桑名市誕生10周年記念シンポジウム

# 「戦国・織豊期@桑名」
# 〈資料集〉

平成26年12月７日
桑名市・桑名市教育委員会・㈶自治総合センター

# 開催にあたって

平成16年12月に、桑名市・多度町・長島町の１市２町が合併し、新「桑名市」が誕生しました。今年が、10年という節目の年ということであり、「本物力こそ桑名力。」をキャッチフレーズに、本市が持つ多彩な魅力を桑名ブランドとしてＰＲしているところです。

桑名は、近江へとつながる八風街道、木曽三川を利用した河川交通、伊勢湾から太平洋へと通じる海上交通の結節点として、戦国時代には町衆による自治が行われ「十楽の津」と呼ばれるほど繁栄した港町でした。そして、浄土真宗の一大拠点であった願証寺を中心として、勢力を広げようとした織田信長に抵抗した「長島一向一揆」では、２度まで信長の攻撃を退けるほどの力を有していました。３回目の攻撃により敗れはしますが、信長にとって大きな脅威であったことは間違いありません。

こうした歴史も桑名市の「ブランド」の一つとして、全国に発信していきたいと考えております。桑名の「ブランド」を磨き上げるためのシンポジウムを、十分ご堪能いただければと思います。

最後になりましたが、今回のシンポジウムを開催するにあたり、助成をいただいた財団法人自治総合センター、後援をいただいた三重県・三重県教育委員会・織豊期研究会をはじめとした関係者の皆様に、厚くお礼を申し上げます。

平成26年12月7日

桑名市長　伊藤　徳宇

# 例　言

１．本書は、平成26年12月７日（日）に桑名市民会館にて開催する新桑名市誕生10周年記念シンポジウム「戦国・織豊期@桑名」の資料集である。

２．本シンポジウムは、㈶自治総合センターの平成26年度シンポジウム助成事業であり、全国モーターボート競走施行者協議会からの拠出金を受けて実施するものです。また、開催にあたり、三重県・三重県教育委員会・織豊期研究会からご後援をいただいた。

３．本書に収録された資料等は未発表資料も含まれるため、引用にあたっては資料報告者にご照会いただきたい。

４．本書の編集は、桑名市教育委員会文化課は行った。

# 目　次

はじめに

例言

目次

プログラム

基調講演　播磨良紀氏（中京大学）

「戦国・織豊期の桑名をめぐって」　・・・・・・・・・・1

報告１　藤田達生氏（三重大学）

「織田政権の基盤－環伊勢海政権の視点から－」　・・・・9

報告２　伊藤裕偉氏（三重県埋蔵文化財センター）

「伊勢湾流通の特質～桑名・安濃津・大湊～」　・・・・15

報告３　安藤　弥氏（同朋大学）

「木曽三川流域における浄土真宗の展開」　・・・・・・27

プロフィール

参考資料　「久波奈名所図会」

「桑名市内城跡位置図」

「関連年表」

# プログラム

日時・場所　　平成26年12月７日（日）桑名市民会館　２階　小ホール

10：00～

**開催あいさつ**　　桑名市長

10：15～11：45

**基調講演**　播磨良紀氏（中京大学）「戦国・織豊期の桑名をめぐって」

【休憩】　11：45～13：00

13：00～13：35

**報告１**　藤田達生氏（三重大学）

「織田政権の基盤－環伊勢海政権の視点から－」

13：35～14：10

**報告２**　伊藤裕偉氏（三重県埋蔵文化財センター）

「伊勢湾流通の特質～桑名・安濃津・大湊～」

14：10～14：45

**報告３**　安藤　弥氏（同朋大学）「木曽三川流域における浄土真宗の展開」

【休憩】　14：45～15：00

15：00～16：00

**パネルディスカッション**

コーディネーター：山本浩樹氏（龍谷大学）

パネリスト：播磨良紀氏・藤田達生氏・伊藤裕偉氏・安藤　弥氏

16：00～

**あいさつ**　桑名市教育委員会教育長

# 基調講演

## 戦国・織豊期の桑名をめぐって

播磨良紀氏（中京大学）

## 基調講演

# 戦国・織豊期の桑名をめぐって

播磨　良紀（中京大学）

## はじめに

戦国期の桑名－自由都市・自治都市、「十楽の津」

「十楽の津」とは？・・・権力との「無縁」の場（網野 1978）

「在地楽市楽座令」（佐々木 1976）

本当に「十楽の津」なのか？－ cf. 原田正記（1985）・岡野友彦（1998）

「十楽の津」はいかに近世権力編成されたのか

本講演の目的

桑名が戦国・織豊期に展開したのかを考える

## 1．戦国期の桑名周辺の様相

1）戦国期の北伊勢

近世の軍記・地誌にみえる「北勢四十八家」

北伊勢の在地領主たちを書上げる－ but.48 家自体不明　48 家がどのような存在か？

桑名郡の領主たちはみえず・・・but. 小串・二階堂・片岡など存在

15 世紀後半－「十ヶ所人数」「北方一揆」の存在（飯田 1984）・・・地域的結合

「十ヶ所人数」－朝倉・富永・海老名・佐脇・疋田・横瀬・南部

室町幕府奉公衆、伊勢神宮内宮領 10 か所を給付・・朝明郡中心

「北方一揆」－伊坂・宇佐美・梅戸・大木・萱生・多胡・田能村

南北朝以降成長した在地領主、幕府が一般御家人として組織・・員弁郡中心

幕府の軍事力として機能

16 世紀の展開

在地領主結合の変容と六角氏・長野氏の進出

朝倉氏と他の奉公衆の争い－永正 16 年（1519）朝明郡小向荘

梅戸氏と長野氏の争い－六角氏の出陣・・長野・朝倉 vs 六角・梅戸・大木

六角氏に従う田能村氏

六角氏の命で通行する商人への「郡役」課税

六角氏を背景に流通路支配（村井 2011）

峯氏と結ぶ萱生・南部・・・「北方一揆」の解体

◎ 15 世紀後半の在地領主連合の解体と他地域の権力の介入

2）「河内」の出現

現在の三重県桑名市多度町・長島町域－木曽三川で囲まれたデルタ地帯

「伊勢国長島」「尾張国長島」－国境領域での権力不掌握地域

「上総介信長、尾張国半国は御進退たるべき事に候へども、河内一郡は二の江の坊主、服部左京進押領して御手に属さず」(「信長公記」首巻)

木曾三川－水上交通・交易・漁業の要地（稲本 1995）

天然の要害

「長島近辺島々之海賊属之」(勢州軍記)　長島の「渡案内」

長島願証寺の創建（『願証寺誌』1936）

蓮如 13 子（六男）蓮淳開基

杉江法泉寺建立した安田信祐一宇建立

覚如「願証寺」命名

法泉寺→香取（桑名市多度町）へ

願証寺堯恵が蓮淳を養子として入寺

永禄２年（1559）院家－本願寺の重要寺院

－三河本宗寺・播磨顕証寺

河内御堂－尾張・北伊勢真宗の中心

本願寺－天文年間（1532-1555）願証寺への与力・護持要請

伊勢・尾張・美濃　本願寺から伝達の取次ぎ

伊勢阿弥陀寺（法盛寺）・辰田西勝寺・尾張興善寺などの直参集団形成

尾張西部の人々－荷之上鯏浦服部左京亮－水軍大将、河内を支配か

大島親宗（長円寺浄念）－北畠家臣ヵ

津島社と香取－津島祭へ香取参加・法泉寺空明・葺師大工職（香取一揆)

◎ 河内地域－長島願証寺を中心に門徒集団の形成・・・独自の支配を展開

## ２．戦国期の桑名

１）中世の桑名

桑名郡益田荘→木曾・長良・揖斐３川河口に形成された中州地域に形成された湊町

禁裏御料所化－益田荘から分離

伊勢湾内の「本警固」が置かれた湊町

室町幕府御料所（稲本 1983）

明応６年（1497）幕府御料所代官斎藤妙純没落

永正８年（1507）長野尹藤桑名出兵占領→町民逃亡　幕府の命により町民退治

天文５年（1536）梅戸氏本願寺を通じ桑名知行懇望→願証寺への援助求める

⇒願証寺の仲介により分割統治

天文９年長野氏と六角・梅戸氏の戦い－六角氏の北伊勢攻め

◎ 桑名郡益田荘－禁裏御料所→室町幕府御料所　長野氏・梅戸氏の争い

２）「十楽の津」の検討

永禄元年（1558）近江国保内商人と枝村商人の紙荷相論

桑名で枝村商人の紙荷の差し押さえ

枝村の主張－「桑名衆」の折紙・・・桑名は「十楽の津」で差し押さえ行為を否定

保内の反論－「桑名衆」・・４人の内３人は河内者、１人は 20 年の在住の者

「十楽の津」の主張は枝村側（原田 1985）

「十楽の津」の内容－「何れの商売をも仕事候」
「荷物取り候事」「有るべからざる事」
「上儀をさへ承引致さず」
「大略何れの売物にも座これ在る御事候」→桑名では無座
⇒上級権力・座からの統制受けず
あくまでも枝村側の主張・・・保内側否定
保内の主張－伊勢道の流通路支配は 40 年以来⇒六角氏の北伊勢・桑名進出以後
「此方者共存ぜざる時はまかり通り候や」⇒ある程度無実化
「たとえ公事（くじ）聞き衆申され候とも、上様御分別を加えられ候」
桑名衆枝木清右衛門－ 20 年桑名在住⇒天文年間の桑名の抗争時
桑名支配への願証寺の影響⇒河内者の桑名衆への参画（播磨 2013）
天文年間の桑名の抗争以降、桑名衆に加入－従来の桑名の自治の変化
実質「上儀をさへ承引致さず」という状況・・・六角「御退治を加えらる津」
◎ 天文９年の抗争以後領主権力の弱体化⇒桑名の自治の変化－「十楽の津」
保内商人の差し押さえ－六角氏の統制
「無縁の場」ではない　認められた「在地楽市令」でもない　自由都市でもない

## ３．織豊期の桑名

１）織田信長の北伊勢侵攻
永禄 10 年（1567）8 月　北伊勢国人の制圧⇒大半が織田配下へ
桑名へ出陣－桑名の抵抗無し　桑名の寺院の安堵
戦勝を祝う顕如－願証寺は対象外か
永禄 12 年の伊勢攻め－桑名で逗留・・・鷹狩り
◎ 織田信長の伊勢侵攻－桑名への出陣　抵抗せず
２）長島一向一揆と北伊勢・桑名（播磨 2010）
元亀元（1570）年本願寺顕如対織田戦争参加への檄文→長島一向一揆の蜂起
天正元年（1573）第二次長島攻め
桑名在陣－北伊勢在地領主の帰順－桑名郡の在地領主の鎮圧
天正２年長島一揆撲滅後－滝川一益長島入城－北伊勢支配
◎ 長島一向一揆により北伊勢在地領主の織田家臣化
３）豊臣政権と桑名
織田信雄の北伊勢支配
天正十二年の戦い（小牧・長久手の戦い）での拠点
桑名信雄直轄領－「織田信雄分限帳」にみえず・・cf. 四日市など重要湊の掌握
天正 18 年（1590）織田信雄転封
豊臣秀次領か？
桑名郡の領有関係不明　秀次領－尾張国及び中伊勢に関白蔵入地（播磨 1994）
天正 18 年尾張清須神明社への神饌料米の輸送を命じる豊臣秀吉朱印状
天正末年ごろの豊臣秀吉朱印状（桑名市博物館蔵）
⇒豊臣政権直轄領

流通の拠点としての湊町

文禄４年（1595）氏家行弘領　桑名城修築

◎ 織田信雄・豊臣政権による桑名の直轄領化

自治都市的な湊町→権力の強い城下町へ

## おわりに

戦国期の桑名－「十楽の津」

六角・梅戸氏と長野氏の抗争以後－支配の弱体化による「自由」

河内者などの参加による自治

本来有する自由都市・「無縁」の場ではない

桑名衆の自治が行なわれる自治都市

織豊政権による支配－流通の拠点

権力の強い城下町へ

〔参考文献〕

網野善彦「中世の桑名について」（『名古屋大学文学部紀要』史学25、1978年、後同『日本中世都市の世界』筑摩書房、1996年、所収）

『無縁・公界・楽』（平凡社選書、1978年）

飯田良一「北伊勢の国人領主－十ヶ所人数、北方一揆を中心として－」（『年報中世史研究』9　1984年）

稲本紀昭「室町幕府と伊勢国－御料所を通じて」（『三重大学教育学部研究紀要 人文科学』34 1983年）

「織田信長と長島一揆」（朝尾直弘教授退官記念会編『日本社会の史的構造　近世・近代』思文閣出版、1995年、所収）

岡野友彦「伊勢国人長野氏による『荘園押領』について」（『三重県史研究』14　1998年）

『願證寺誌』（願證寺 1936年）

佐々木銀弥「楽市楽座令と座の保障安堵」（永原慶二編『戦国期の権力と社会』東京大学出版会、1976年、後、『日本中世の都市と法』吉川弘文館、1994年、所収）

原田正記「戦国末『十楽之津』相論の再検討」（『歴史評論』426 1985年）

播磨良紀「豊臣政権と伊勢国－所領関係をめぐって」（『四日市市史研究』 7 1994年）

播磨良紀「織田信長の長島一向一揆攻めと『根切』」（新行紀一『戦国期の真宗と一向一揆』吉川弘文館 2010年）

播磨良紀「戦国期伊勢・尾張国境地域の歴史的展開」（『年報中世史研究』38、2013年）

村井祐樹「戦国大名六角氏と近江国内外交通」（『近江地方史研究』42　2011年、後、『戦国大名佐々木六角氏の基礎的研究』校倉書房、2012年、所収）

## 【史料編】

### 史料（1）枝木明朝等連署書状写　今堀日吉神社文書」

猶々事終候ハすハ、右之子細をハ罷上候て成共可レ申候、此外不レ申候、

御折紙拝見令レ申候、仍其方保内出入之儀付而、態令レ仰越一候、此津者諸国商人罷越、何之商売をも仕事候、殊昔より十楽之津ニ候へ者、保内より我かまゝなとゝ申儀もおかしき申事候、其分被レ成二御心得一、可レ有二御申一候、猶使者可レ被レ申候、恐々謹言、

九月五日　　丹羽善兵衛　定　滞在判
　　水谷藤右衛門尉　常　信在判
　　丹羽甚衛門　定　金在判
　　枝木清衛門尉　明　朝在判

枝村孫左衛門尉殿
同源次郎殿
御両所
御報

〔読み下し（本文のみ）〕

御折紙拝見申せしめ候。よって其方保内出入の儀に付いて、わざと仰せ越せしめ候。この津は諸国商人まかり越し、何れの商売をも仕事候。殊（こと）に昔より十楽の津ニ候へば、保内より我かまゝなとゝ申儀もおかしき申し事に候、其分御心得を成され、御申有るべく候、猶使者申さるべく候。恐々謹言。

### 史料（2）保内商人申状案　今堀日吉神社文書

条々

（中略）

一　桑名十楽津之由、被レ書付一候彼折紙四人之内、三人ハ河内者候歟、〔枝カ〕林　木清右衛門も　廿ケ年ほと桑名ニ在レ之者候哉、縦公事聞衆被レ申候共、　上様可レ被レ加二御分別一候、事をたくミ申上候段、可レ為二聊爾一候、次四十年以来、伊勢道を枝村衆罷通由被レ書付一候、又いせ道かり候儀も一両人出状段ハ合点と相見候、旁以被レ加二御分別一被仰付一候様可レ預二御申一事、

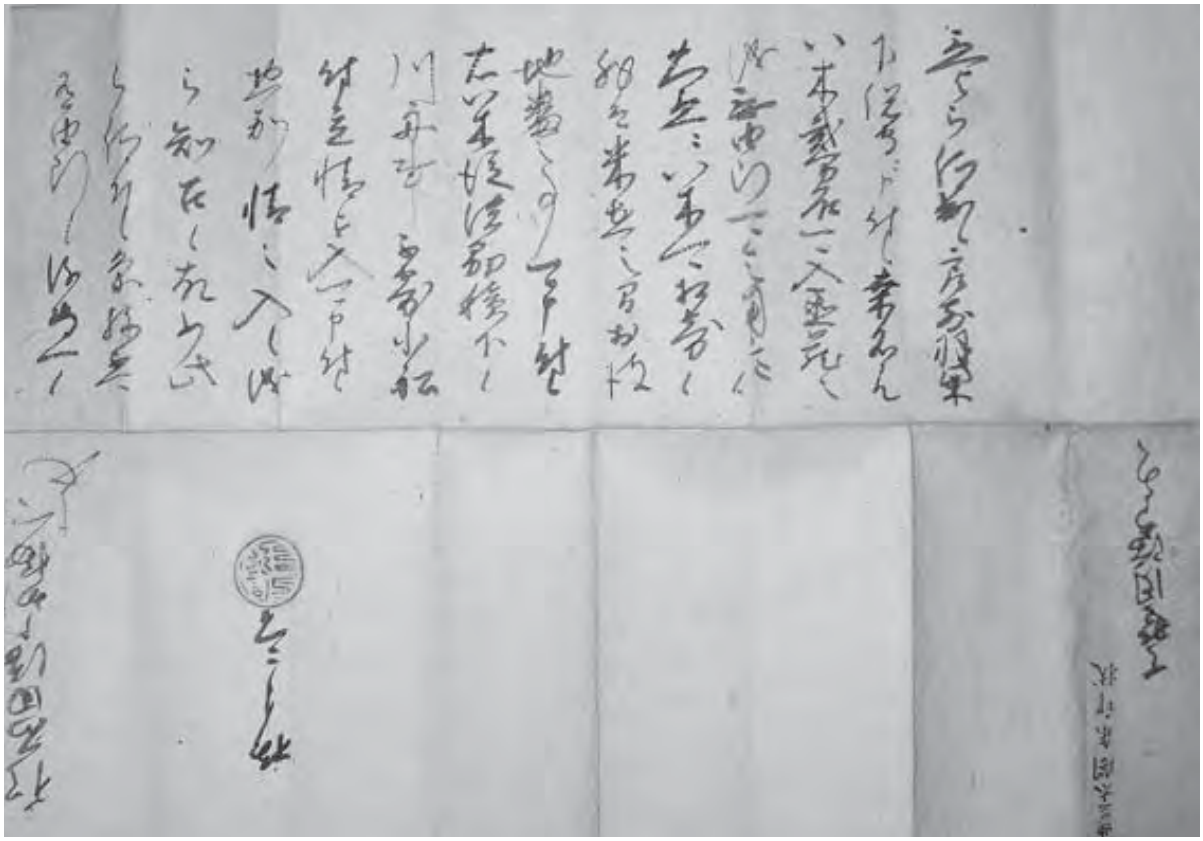
（中略）

右為二覚書一付候旨、可レ然様御披露可〔存脱カ〕忝候、

（永禄元年）
十一月十七日　　保内商人中

〔読み下し（本文のみ）〕

一　桑名十楽津の由、書き付けられ候彼の折紙四人の内、三人は河内者に候歟、〔枝カ〕林　木清右衛門も　廿か年ほと桑名にこれ在る者候哉、たとえ公事聞衆申され候共、　上様御分別を加えられ候。事をたくミ申し上げ候段、聊爾（りょうじ）たるべく候。次いで四十年以来、伊勢道を枝村衆まかり通る由書き付けられ候。又いせ道かり候儀も一両人出状段は合点と相見え候、旁（かたがたもって）　以被加御分別仰せ付けられ候様御申に預かるべき事、



**史料（3）年未詳一二月三日付「豊臣秀吉朱印状」　桑名市博物館蔵**

急度被仰出候、最前羽柴下総守ニ申付候、桑名にて八木弐万石可ニ入置一蔵之儀、無二由断一可レ令二用意一候、火急ニ八木可二相寄一候、然者米在レ之間、於二彼地一番之事可二申付一候、川舟事不レ寄二小船一付立、情々入之儀被二知召一候故、如レ此被仰付候条、弥不レ可レ有二由断一候儀専一候、猶石田治部少輔可レ申候也

極月三日　（朱印）

天野周防守とのへ

〔読み下し〕

急度（きっと）被仰せ出され候。最前（さいぜん）羽柴下総守に申し付け候。桑名にて八木弐万石入れ置くべき蔵の儀、由断無く用意せしむべく候。火急に八木あい寄すべく候。しからば米これ在る間、彼の地において番の事可申し付くべく候。川舟の事小船に寄らず付き立て、精々入るの儀知ろし召され候故、かくの如く仰せ付けられ候条、いよいよ由断有るべからず候儀専一に候。猶石田治部少輔（しょう）申すべく候也

極月三日　（朱印）

天野周防守とのへ

# 本日の講演用語集

**自由都市**—もともと西洋の中世都市の概念で、都市領主から大幅な自立を獲得した都市。封建諸侯から自治権を獲得した都市。日本では 16 世紀の堺などがどの程度に自由都市であったのか、という議論がなされている。

「**北勢四十八家**」—江戸時代の地誌や合戦記などに記される北伊勢の在地領主。城館をもち在地支配をしたとされるが、伝承の域をでないものもる。

**編さん物**—諸種の材料を集め、またはそれに手を加えて編集した記録。同時代史料でないものが多く。史料的価値は下がる。

「**伊勢国十ヶ所人数**」—朝明郡内の伊勢神宮内宮領 10 ヶ所を知行する室町幕府奉公衆。
朝倉・海老名・佐脇・疋田・富永・横瀬・南部氏。

**奉公衆**—室町幕府将軍の直属軍。将軍に近侍し、近習・申次などの諸役を務めた御目見え以上の御家人。

「**北方一揆**」—員弁・朝明郡内の地名を有する在地領主。多胡・宇佐美・田能村・大木・萱生・伊坂・梅戸氏。

**院家**—門跡とともに特権を許された寺格。

**檄文**－戦争の際に同志を募ったり、役所の通達・布告を知らせるために書かれた文書。

**長島一向一揆**—長島願証寺を中心に北伊勢・南美濃、西尾張の僧侶・門徒・国人・百姓などが起こした一揆。1570（元亀元）の本願寺顕如による対織田政権との戦いへの指令を受けて蜂起し、同年小木江城の信長弟織田信興を討ったことに始まり、それに対し信長は 1571・1573 年・1574 年の 3 度にわたって長島を攻撃した。

**顕如**－本願寺第 11 世法主。諱は光佐。諸大名などとも接近するが、1970 年（元亀元）織田信長と全面戦争を展開した。1580 年（天正８）勅命講和し、紀州雑賀に退く。息教如と対立し和解をするが、その後本願寺の東西分派につながる。1592 年 ( 天正 20) 死去。

**警固**－海関のこと。もともとは一定の財貨を与えて海賊などと妥協して安全を防ぐものであり、警固役という関税になった。過書（通行許可証）である「札」が出された。

**禁裏御料所**－天皇家の直轄領。

**御料所**－室町幕府の直轄領。

**保内商人**－近江国蒲生上郡得珍保の下四郷の商人をさし，野々郷商人，野々川商人ともいう。近江国守護佐々木六角氏の保護をえて，特権的な座商業を展開した。

**折紙**－古文書の様式の一つ。料紙を横に半分折って用いた文書。

**公事聞衆**－訴訟担当者。裁判人。

**織田信雄**－信長の次男、伊勢国司北畠具教の養子となり一時北畠氏を称した。信長死後尾張・伊勢・伊賀を領すが、1584（天正 12）年以降尾張・北伊勢 5 郡の領主。

**転封**—大名の配置替えのこと。移封ともいう。

**関白蔵入地**－関白（豊臣秀次）の直轄領。

# 報告 1

## 「織田政権の基盤－環伊勢海政権の視点から－」

藤田達生氏（三重大学）

# 報告１

# 織田政権の基盤－環伊勢海政権の視点から－

藤田達生（三重大学教育学部）

## はじめに

・最近の信長論の高まり→東国の戦国大名論に埋没→中・近世移行期論になっていない＝研究史を無視
→どうして信長が台頭できたのか、どうして近世化への梶を切ったのかという視点が欠如。
・拙論の起点…「今堀日吉神社文書」から→近江（保内）商人に着目。
・越前敦賀や若狭小浜から三津と称される塩津（滋賀県長浜市）・海津（滋賀県高島市）・今津（滋賀県高島市）へ、三津から湖上を湖東の薩摩（滋賀県彦根市）・伊庭（滋賀県東近江市）などの諸港へ、さらに八風越あるいは千種越を経て桑名・四日市などの北伊勢諸都市へと到達するルートによって、日本海流通と太平洋流通とが結ばれていた。ちなみに当時保内商人が伊勢道（八風・千種街道）の通行の独占を主張していた商品としては、麻糸・紙・陶磁器・菜種ごま・のり・魚・伊勢布・呉服などがあった。

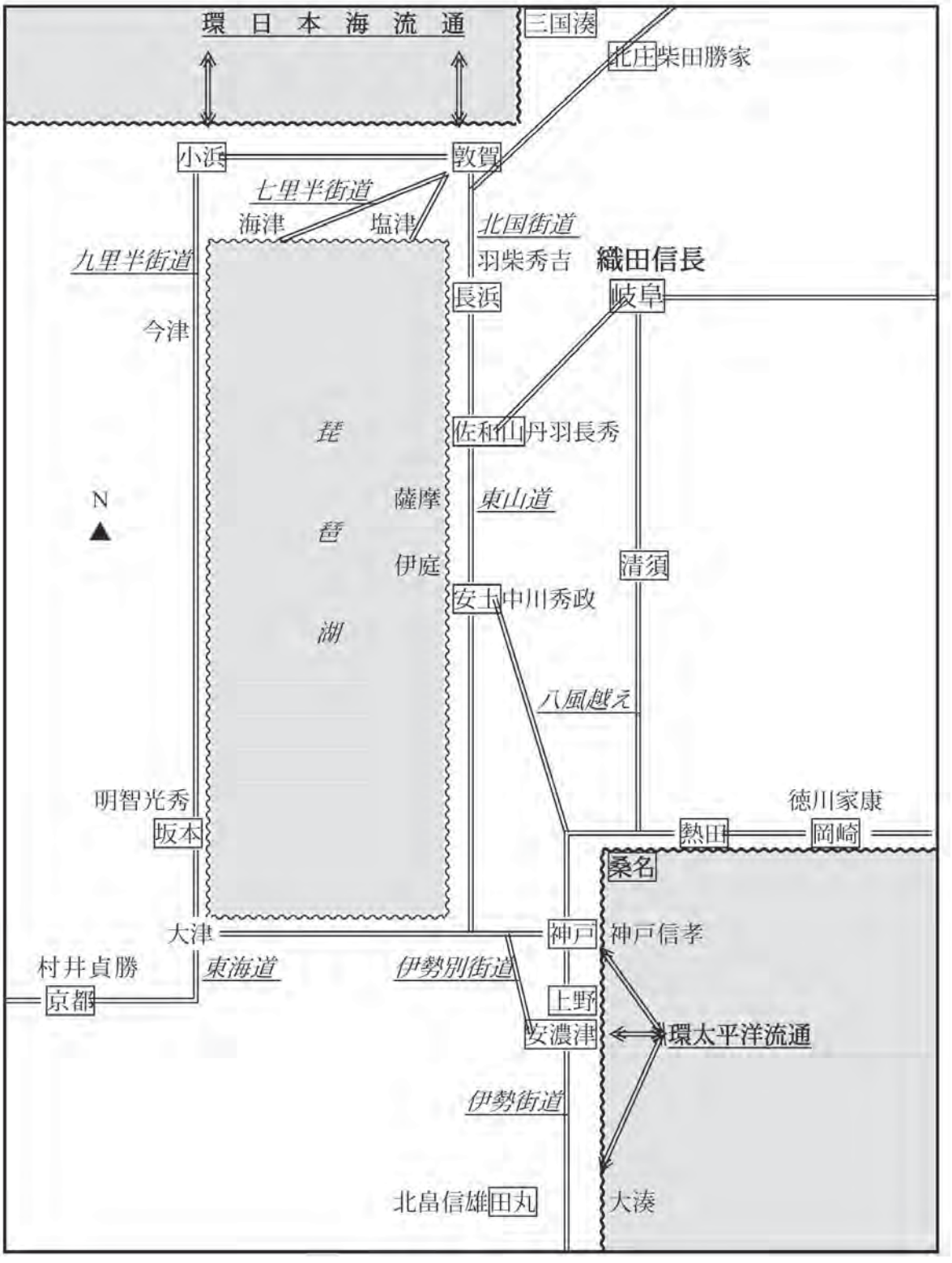
## １．始期―尾張・美濃・伊勢三カ国の統一

・信長は、上洛戦の前提として永禄 11 年（1568）２月に中部伊勢に進攻し、三男信孝を河曲郡の神戸氏の、実弟信包を安濃郡の長野氏の養子とし、さらに一族津田一安を伊勢を代表する港湾都市・安濃津（三重県津市）に置く→東山道（後の中山道）のみならず北伊勢を縦貫する東海道を掌握するため。
・信孝は神戸城（三重県鈴鹿市）に信包は上野城（津市）に入城し、一安を含めた三人は、環伊勢海の要港を支配→永禄 12 年９月には南伊勢の国司大名・北畠氏を攻撃し、講和によって次男信雄をその養子とすることに成功→伊勢一国が信長の新たな領国に。
e.g 長野氏の当主となった信包は、織田家中では信雄に次ぐ第三番目の実力者。一安にかわって安濃津の対岸のもっとも安定した砂堆に着目して津城を築城し、上野城から移った。縄張は滝川一益が担当し、天正８年（1580）までに完成。その特徴は、大手を伊勢湾側に向けて設け、城内に港湾機能を取り込み、城下町と橋や舟で結ばれたこと。同年に信雄は、居城田丸城（三重県玉城町）が炎上したことから、要港細汲を擁する松ケ島（三重県松阪市）に築城し本拠地を移転。松ヶ島城は、五層天守を中心とする海城であり、伊勢街道を城下町に引き込む。
・信長にとって伊勢の掌握は、東海道をはじめとする東国と京都を結ぶ大動脈ばかりか、関東への足がかりとなる太平洋海運を押さえることを意味する→同国には、桑名・安濃津・大湊（三重県伊勢市）に代表される東海―関東と結ぶ太平洋流通上の有力港湾都市があった。
・信長は、既に尾張・美濃の商売を統括する御用商人を抱えていた。その代表が尾張出身の伊藤惣十郎→法名を安中といい清須で信長に仕え、元亀３年（1570）12 月、信長より朱印状を与えられ、改めて両国における唐人方（輸入呉服）と呉服方の商人司に任命され、役銭の徴収や他国商人の監督にあたった。
・尾張・美濃の商品は、舟運を利用して伊勢の港湾都市に廻漕される場合が多かった。伊勢の要港には、環日本海地域の物資が越前・若狭から保内商人に代表される近江商人によって、琵琶湖と鈴鹿山脈を

越えて直接もたらされた。

・**信長が、伊勢に実弟や子息まで置いたのは、東国―京都および日本海―太平洋の流通がクロスする同国の掌握が、尾張・美濃の領有を保障する重大な条件と判断**→尾張や三河で荷を積んだ舟は、海流の関係で一旦は安濃津などの伊勢側の港湾都市に寄港し、そののち伊勢湾を出ていった→伊勢一国の領有は、莫大な富の集積を可能にしたのであって、環伊勢海地域を基盤とする政権にとっては、まさしく生命線。

・安土への本拠地移転→領国の拡大に伴う流通の結節点に移動。




環伊勢海政権ネットワーク概念図（天正３年段階）

## ２．終焉―小牧・長久手の戦い

（１）戦争の推移

・天正 11 年４月の賤ケ岳の戦いによって、織田信雄が織田家家督として認められる→織田政権の継承。

・天正 12 年３月３日、家康が三河・遠江に徳政令発布→戦争準備。

・３月６日、信雄が秀吉派の三家老（秀吉に人質提出）―岡田重孝・津川義冬・浅井田宮丸―を殺害。

・北伊勢決戦から北尾張決戦へ

・主な戦闘の推移

北伊勢（３月 12 日～亀山・峯城）合戦→松ヶ島城の戦い→羽黒合戦（３月 17 日）→長久手合戦（４月９日）→加賀野井合戦→竹ヶ鼻城水攻め→蟹江合戦→木造合戦→講和（11 月３日、於桑名）

秀吉は、当初は信雄領国の崩壊をめざすが、池田恒興・森長可の与同により、北尾張から三河攻撃をめざす。長久手敗戦の後も、家康の尾引出しを画策し続ける。

信雄は、一貫して守勢にあったが、長島・小牧・清須のラインで防戦し、勝利した暁には上洛し「天下人」の立場を確実にしようとした。

（２）天下分け目の戦い

・秀吉の天下簒奪戦…家康は、秀吉の信雄を「天下人」とする誓約違反を名分にする。

・慶長５年（1600）９月の関ヶ原の戦いにも匹敵する大規模戦争として位置づけるべき。

Ⅰ．両軍の首将がめざしたのは、天下人としての実権の掌握であったこと。

信長没後の最高権力者の座をめぐって争われた、織田信雄と羽柴秀吉との大規模戦争。

Ⅱ．直接関係のない大名・領主も、どちらかの陣営に属することを強制されたこと。

きわめて政治性の高い戦争ではあったが、戦場の周辺にあたる尾張・美濃・伊勢の大名・領主層の大半は、他律的に戦争に巻き込まれていったといってよい。また信雄に与同した北伊勢の一向一揆勢力の蜂起もあった。参戦せねば戦後に敵方与同とみなされ、処分されることが予想されたことから、彼らにとって陣営の選択は相当に深刻な問題となった。

Ⅲ．主戦（大会戦）ばかりか全国的規模で局地戦がおこなわれ、長期に及んだこと。

| 地　域 | 対戦大名（信雄方・秀吉方） | 備　考 |
|---|---|---|
| 中国・四国 | 長宗我部元親・十河存保 | |
| | 毛利輝元・来島通総 | 双方秀吉方 |
| 和泉・紀伊 | 根来寺・中村一氏 | |
| 北国 | 佐々成政・前田利家 | 天正 13 年８月まで継続 |
| 東国 | 北条氏政・佐竹義重 | |
| | 小笠原貞慶・上杉景勝 | |

**小牧・長久手合戦における主要局地戦**

四国から東国に及ぶ広範な地域の大名・領主に一揆勢力までが、それまでの合従連衡や国郡境目相論に規定され、両陣営に分かれて戦ったことは重要→主戦場の動向を意識しながらも従来のローカルな抗争を継続し、主戦が終結したのちも展開した。

（３）羽柴政権の成立

・陣立書の成立…従来の一揆的秩序の貫徹する軍隊内部に、命令系統と上下秩序を持ち込むものであり、戦争史上の画期→明らかに中世の軍隊とは段階を画する新たな公儀の軍隊が誕生。

・秀吉の朱印使用が本格化…戦争の終局にあたる天正 12 年 10 月に少将に任官し、御内書形式の朱印状

を発給する。

・羽柴―織田序列の確定

信雄の臣従…11月に講和が成立。秀吉は、天正13年2月に信雄を上洛させ、自ら権大納言を辞し、信雄を正三位権大納言に推挙→当時武家において最高の官位→秀吉は、同年3月に従二位内大臣に→信雄は、秀吉と同等の地位を確保したかったのであろうが、上洛に応じたことで、秀吉への臣従が確定→抜け目ない秀吉は、同時に信雄を家康を臣従させるための交渉の窓口とする→**信雄は天下人の座から転落し、羽柴―織田という序列が確定**→秀吉は、近衛前久の猶子となることで、同年7月11日に関白に任官し、名実ともに天下人となった。

・家康との臨戦態勢

天正14年10月家康の上洛・臣従まで燻り続ける。

## むすび

・信長が岐阜を本拠地とする期間は、永禄10年9月から天正4年2月までの約10年間→結果的には安土時代より長期に及んだ。室町幕府体制と共存しながらも、戦国大名から近世権力へと大きく変貌した時期であり、その間に確定される織田家本領ともよびうる領国は、尾張・美濃・伊勢の環伊勢海三カ国→ここでおこなった支配は、他の戦国大名とは異なった斬新なもので、関所廃止や街道整備をはじめ豊臣政権や江戸幕府の基本的な流通政策として引き継がれていくものもあった。

・戦乱状態が深刻であればあるだけ、地域社会の諸階層に強烈な平和願望をもたらす。環伊勢海地域のなかでも、特に斎藤氏や今川氏という戦国の梟雄に挟まれた尾張のような境界地域にこそ、強力な領主権力が出現する潜在的な可能性が高かった→環伊勢海地域とは、斎藤・今川両氏がにらみ合う境目であり、なによりも日本における東西の境目でもあった→両氏との境目決戦の末、日本の境界地域に近世国家の原型が胚胎したと言ってよい→**境界中の境界といってよい地域から新たな時代が誕生。**

・環伊勢海政権の骨格は、天正12年の小牧・長久手の戦いまで維持された。

〔参考文献〕
小島廣次「伊勢大湊と織田政権」（『日本歴史』372、1979年）・「秀吉の才覚を育てた尾張・津島」（『逆転の日本史　つくられた「秀吉神話」』羊泉社、1997年）
谷口　央「小牧・長久手の戦い」（『長久手町史　本文編』2003年）・「小牧・長久手の戦いから見た大規模戦争の創出」（藤田達生編『小牧・長久手の戦いの構造　戦場論上』）
三鬼清一郎『豊臣政権の法と朝鮮出兵』（吉川弘文館、2012年）
拙著『日本近世国家成立史の研究』（校倉書房、2001年）・『謎とき　本能寺の変』（講談社現代新書、2003年）・『秀吉神話をくつがえす』（講談社現代新書、2007年）・『天下統一』（中公新書、2014年）など
拙稿「織田政権と尾張―環伊勢海政権の成立―」（『織豊期研究』創刊号、1999年）・「小牧・長久手の戦いと羽柴政権」（『愛知県史研究』13、2009年）など

『八日市市史　第2巻　中世』（1983年）
『愛知県史　資料編11 織豊1』（2003年）
『愛知県史　資料編12 織豊2』（2009年）

# 報告２

「伊勢湾流通の特質～桑名・安濃津・大湊～」

伊藤裕偉氏（三重県埋蔵文化財センター）

# 報告２
# 伊勢湾流通の特質～桑名・安濃津・大湊～

伊藤裕偉（三重県埋蔵文化財センター）

## はじめに

本報告の課題は、桑名をはじめとした伊勢湾沿岸部における中世後期物流の特徴を見ることにある。そこで、まずは桑名と伊勢湾沿岸部の特徴を把握し、そのうえで日本列島における当地の位置づけを検証してみたいと思う。

## １　桑名の動向

桑名は、木曽川・長良川・揖斐川のいわゆる「木曽三川」が合流する地にある。「桑名」は古代以来の郡名（桑名郡）である。『和名類聚抄』には桑名郡の郷に「桑名久波奈」が見える[*1]。港としての桑名は、郡津ないしは郷津として成立したのであろう。

長和２（1013）年に、伊勢平氏の平致経が藤原頼通に益田荘を寄進している[*2]。桑名は益田荘の一角であることが中世後期の史料（後掲）から知られるが、一方で 16 世紀代まで続く禁裏御料所でもあった[*3]。

伊勢平氏庶流の平貞衡は「安濃津三郎」を名乗っていたが、その孫から続く３代（清綱－維綱－良平）は「桑名富津三郎（清綱）」「桑名三郎（維綱）」「桑名九郎（良平）」と、いずれも桑名を関した苗字を名乗る[*4]。具体的な支配形態こそ不明だが、伊勢平氏が桑名に関与していた（あるいはそう認識されていた）ことは確認できる。また、清綱の父である貞清は、父の貞衡と同じ「安濃津三郎」を名乗っている。ここから間接的だが、伊勢平氏を通じて安濃津と桑名の関係も想定できる。伊勢平氏貞衡流に関する課題は多い[*5]が、この記載から安濃津・桑名などが、平安時代後期には伊勢平氏と関係を持ちつつ対外的に知られていたことは認めてよいであろう。

鎌倉時代は、前期の状況ははっきりしないが、後期は大福田寺に関する情報がある。福島金治氏の検討によれば、当該期における律宗系寺院の法統が、鎌倉・極楽寺から桑名・大福田寺に流れているという[*6]。極楽寺は忍性が建立した鎌倉の大寺院である。極楽寺と大福田寺との関係から、福島氏は鎌倉と桑名とが直結していたと評価している。

南北朝期から室町期にかけての桑名に関しては、後述の木材関連以外では今ひとつ明確ではない。戦国期の桑名は「十楽の津」と呼ばれており、自治都市としての検討が、豊田武氏をはじめ古くからなされている[*7]。網野善彦氏は貢御人層の活動や益田荘との関係を追求するなかで桑名を評価し、「十楽の津」と呼ばれる背景に、氏の言う「無縁・公界・楽」の観点を絡めて論じている[*8]。

さらに、桑名と同じ木曽三川河口部の長島では、16 世紀頃には長島願証寺を中核とした本願寺門徒による一揆的結合が形成されている。『証如上人日記（天文日記）』に拠れば、長島願証寺と桑名は浅からぬ関係にあった[*9]。

〔史料１〕

従柳原、禁裏御料所勢州益田庄桑名事、以使承候、就此儀被成　綸旨候、又対日野中納言女房奉書有之、

此在所事万加願証寺意見之段、被及聞召間、於申付者、可被喜思食之由候、彼方書状候（後略）」[*10]

天文８（1539）年の段階で、禁裏御料所の益田庄桑名について、願証寺の意見を重視するという禁裏側の意向が記されている。これに対し、本寺である本願寺は、梅戸氏と長野氏による桑名の領有権争いを理由に断りを入れている[*11]が、実際には、深い関与を有していたことが他の記述から知ることができる[*12]。

一向一揆で著名[*13]な木曽三川河口部は、近年では稲本紀昭氏や播磨良紀氏らにより、伊勢湾岸の地域関係を視野に入れた検討もされている[*14]。桑名と津島（尾張、現在の愛知県津島市）は天王祭を通じて関係があった[*15]。文明５（1473）年には持是院（美濃国守護代斎藤妙椿）が美濃国革手（現在の岐阜市）春日社に対し、益田荘春日社の新造を命じている[*16]。以上のように、中世後期の桑名は近隣地域との様々な関係を有していた。

## 2　桑名に集荷された商品

中世後期の桑名を介した物流に関しては、『今堀日吉神社文書』[*17]の分析によって、近江商人によるその状況が明らかとなっている。中村研氏や藤田裕嗣氏らによる研究によると、中世後期の桑名には、本座商人（枝村・横関）・四本商人（小幡・保内・沓掛・石塔）らの近江商人が関与し、美濃和紙などを集荷するための商人宿が存在していた[*18]。

第１表　伊勢湾沿岸部の商品（『今堀日吉神社文書』による）

| 種　別 | 史料記載名 | 史料記載名（特産品的記載） | 品　名 | 生産地（太字＝確定） | 近江商人根拠地 | 『今堀日吉神社文書集成』史料番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 狩猟 | 鳥の類 | | 鳥 | 美濃ほか？ | 保内 | 140 |
| 漁撈 | 魚の類 | | 魚 | 伊勢？尾張？ | 保内 | 140 |
| | 海苔の類 | | 海苔 | 伊勢？尾張？ | 保内 | 140 |
| | アラメ | | アラメ | 伊勢？尾張？ | 保内 | 140 |
| 水産業 | 塩 | | 塩 | 伊勢ほか | 保内 | 140 |
| 農業 | あさのを | 信濃苧 | 青苧 | 信濃　その他 | 保内・枝村 | 140・204 |
| | 木わた | | 木綿 | 三河　伊勢 | 保内 | 140 |
| | あふら草 | | 胡麻・荏胡麻 | 各地か？ | 保内 | 140 |
| | 若め | | 若芽？（不明） | | 保内 | 140 |
| 手工業 | 紙 | 美濃紙<br>勢州地紙 | 紙 | 美濃　伊勢<br>尾張　近江 | 枝村・保内 | 140・173・175・<br>186・188・190 |
| | 土の物 | | 土器（陶器） | 尾張　美濃 | 保内 | 140 |
| | わげ物 | | 曲物 | 美濃（木曽）？ | 保内 | 140 |
| | 布 | 伊勢布　越後布<br>越中布 | 麻織物か | 伊勢　越後<br>越中 | 保内・枝村 | 140・204 |

近江商人が扱った商品については、近江商人の分析史料としては扱われているものの、桑名を含めた発信点からの検討はなされていない。そこで、『今堀日吉神社文書集成』から、近江商人が伊勢道（鈴鹿峠越、八風峠越など）経由で扱った商品を抽出したのが第１表である。時期は、おおよそ16世紀後半頃である。ここに記された商品は、狩猟業・水産業・農産物・手工業、といった区分ができる。

**狩猟・漁撈**　鳥類の具体的な名称は不明だが、山間部での猟による獲物だろう。海苔・荒布は伊勢湾、魚は伊勢湾のほか、木曽三川で捕れる川魚が含まれるかも知れない。

**水産業**　製造業でもある製塩は漁撈から分離した。塩は伊勢の特産である。尾張あたりでも生産されていた可能性がある。

**農業**　「あさのを」は青苧のことで、織物の繊維原料にあたる。信濃が特産だが、伊勢湾岸の各地でも採れたと考えられる。「木わた」は木綿のことで、伊勢や三河の特産品である[*19]。「あふら草」は、植物油を精製する胡麻や荏胡麻に相当する。伊勢湾沿岸部各地で栽培されていたと見られる。「若め」は不明。海草の「ワカメ」とも考えられるが、史料の記載順から見て農作物の一種と見られる。

**手工業**　紙は美濃の特産で、近江枝村商人が特権的に扱っていたが、伊勢産と見られる「勢州地紙」もあり、興味深い。「土の物」とは、地域的に見て瀬戸美濃産の陶器類であろう。「わげ物」とは曲物のことで、木材加工品である。大形の木材が必要となるため、木曽桧との関係が深いと推察される。あるいは、後述の神宮杣山との関係から、搬入された木曽材木の余材を用いて伊勢で製作された可能性も考えられる。「布」は総じて麻織物と考えられるが、「伊勢布」のほか、「越後布」や「越中布」も見られる。

**商品の搬入先**　近江商人が品物を扱うためには、桑名をはじめとした集荷地が必要である。桑名には、

美濃・尾張・伊勢・三河などの伊勢湾沿岸各地から様々な物資が集荷されている。なかでも、美濃・尾張・伊勢の物資が多い。しかしそれに止まらず、信濃・越中・越後といった木曽三川遡上ルートによる集荷もなされていたのである。

桑名から近江商人の手を経て運ばれた商品は、近江のほか京都へも運ばれたと考えられる。また、藤田裕嗣氏の研究によれば、五箇商人にも属する小幡商人は久里半街道（近江～若狭）を通じ、伊勢湾岸と若狭湾沿岸とを往来していたという[*20]。京都を中継することなく、地域と地域が直接つながる事例として貴重である。

なお、鈴鹿山系経由の伊勢道を用いた物流ルートには、領主権力も介在した。四本商人による商品流通に際し、近江六角氏による交通路支配が見られることが播磨良紀氏によって指摘されている[*21]。

## 3　伊勢湾沿岸部のなかの桑名

桑名は、伊勢湾を通じて神宮（伊勢神宮）との関係も深い。神宮と桑名との関係は、飯田良一氏による検討がある[*22]。飯田氏は伊勢湾の海上警固との関係で桑名について触れ、神宮領ではない桑名に神宮が関与する背景を、「神宮の持つ海に対する支配権に由来する」と位置づけている。実体として「支配権」があったかどうかはともかく、神宮の権威が海上航行に影響を与えたことは認めてよいであろう。

### a　御杣山と桑名

神宮の式年遷宮は、中世では途絶えがちだった[*23]が、それでも材木の調達は、神宮にとって重要案件であった。神宮の用材を確保する山林のことを「御杣山」といい、各地に設定されていた。

御杣山に関しては、神宮司庁の編纂による『神宮御杣山記録』[*24]や、木村政生氏による研究[*25]に

第２表　神宮御杣山の推移

| | 年月日 | 西暦 | 内容 | 典拠 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 寛仁3. | 1019 | 寛仁三年伊勢皇太神宮遷宮、正殿御材木採造御領杣、至于宝殿并外院材木者、造出志摩国答志郡杣、外院桧皮・稗者従巷志河上採出造進云々（後略） | 『砂巌』（柳原家記録）（『神宮御杣山記録』1） |
| 2 | 寛仁3. | 1019 | 寛仁三年大神宮正殿造替用木、伊勢国神道山之御杣、依有子細、以志摩国答志郡材木被用之、 | 『園太暦』文和5.3.24 |
| 3 | 寛仁3. | 1019 | （前略）東西宝殿内一宇、採用志摩国答志郡伊雑神戸材木（後略） | 『師守記』文和5.3.28 |
| 4 | 長元9. 12. 7 | 1036 | （前略）造伊勢太神口使大中臣朝臣為信、背先例、採出国領鈴鹿山杣太神口造作御材木事、（後略） | 『師守記』文和5.3.28 |
| 5 | 長暦1. | 1037 | （前略）抑造宮使為信、以鈴河山之木、御垣外院殿舎等之材木ニ造テ（後略） | 『太神宮諸雑事記』 |
| 6 | 正安4. 8. 10 | 1302 | （前略）造伊勢皇太神宮神道山料木採尽之間、江馬山・阿曽山以何可被採用乎間事也、以江馬山為吉之由、官寮共ト申之（後略） | 『師守記』文和5.3.28 |
| 7 | 暦応2. 9. 27 | 1339 | （前略）雖望申美濃国杣、不及勅許（後略） | 『中院一品記』（『神宮御杣山記録』1） |
| 8 | 暦応2. 12. 10 | 1339 | （前略）造伊勢太神宮御杣、被移参河国設楽山吉凶如何（後略） | 『中院一品記』（『神宮御杣山記録』1） |
| 9 | 暦応4. 10. 28 | 1341 | 宣旨云、造伊勢豊受太神宮御杣、可為美濃国白河山者、 | 『師守記』文和5.3.28 |
| 10 | 延文4. 7. 28 | 1359 | （前略）去暦応年中、被移御杣山於参川国設楽山之時、被行仗儀、被移之了、仍今度及不仗儀歟、今度者美濃国北山、（後略） | 『愚管記』（『神宮御杣山記録』1） |
| 11 | 応安6. 5. | 1373 | （前略）御杣山ハ美濃山ナルヨシ、（後略） | 『皇太神宮御杣興廃沿革』（『神宮御杣山記録』1） |
| 12 | 応永6. 5. 21 | 1399 | （前略）已上於美濃御杣山、可奉採用之、（後略） | 『応永七年内宮仮殿遷宮記』（『神宮御杣山記録』1） |
| 13 | 応永24. 3. 28 | 1417 | （前略）御材木等於美濃御杣山可奉採用之（後略） | 『応永廿五年内宮仮殿遷宮記』（『神宮御杣山記録』1） |
| 14 | 文安2. 10. 3 | 1445 | （前略）雖有下行、自美濃山不採料材、（後略） | 『文安二年皇内宮仮殿遷宮記』（『神宮御杣山記録』1） |
| 15 | 宝徳1. 9. 21 | 1449 | 廿一日（中略）造伊勢大神宮御杣山可為美濃国木曽岩殿山之由宣旨、被下造宮使了、（後略） | 『康富記』（『史料大成』39） |
| 16 | 寛正6. 12. 23 | 1464 | （前略）汚御材木等者、自美濃山可被取下（後略） | 『皇太神宮引付』（『神宮御杣山記録』1）＊内宮引付？ |
| 17 | 文正1. 11. 20 | 1465 | （前略）東山御山荘料美濃国材木事、斎藤五郎兵衛尉豊基、松田主計允数秀等被仰付之、 | 『斎藤親基日記』（『増補続史料大成』10） |
| 18 | 文明1. 9. | 1469 | （前略）自美濃山被採下御材木（後略） | 『皇太神宮御杣興廃沿革』（『神宮御杣山記録』1） |
| 19 | 弘治2. 4. 1 | 1556 | （前略）口志満王大夫、従美濃帰国也（後略） | 『永禄記』（『神宮遷宮記』4） |
| 20 | 天正13. | 1585 | （前略）御遷宮御材木宮川之上江馬大杉ヨリ取下、（中略）天正御遷宮之節も大杉山ヨリ御材木出候（中略）又右天正書留ニ木曽山之儀も相見エ（後略） | 『古来御遷木山勘文』（『神宮御杣山記録』1） |

詳しい。これらによれば、鎌倉期まで伊勢国内各地にあった御杣山は、暦応２（1339）年に三河国設楽山、同四年には美濃国白河山と、めまぐるしく変更された。大型材木が伊勢国内では確保しにくくなり、次第に遠方へと求められ、木曽へと至ったのであろう（第２表）。神宮用材が木曽から搬送されるにあたり、搬出元の桑名と搬送先の山田・大湊との関係は、次第に深化していった。神宮御杣山の動向から、その画期は 14 世紀中頃と考えられる。

永正８（1511）年の史料には、桑名が「神用廻船、其外御遷宮時ハ、御材木等悉皆自彼所着岸事候」とある[*26]。神宮へと向かう木曽三川流域産材木は、桑名が一手に引き受け、大湊・山田へと搬送された。永禄６（1563）年に挙行された外宮遷宮の記録である『永禄記』には、桑名から大湊へ「百余本」の材木が搬送され 30 貫文が支払われたことが記されている[*27]。

木曽の材木は神宮の独占物ではない。応永 30（1423）年には、鎌倉円覚寺の造営にあたっての用材が桑名から搬送されている[*28]。桑名は、各地に向かう木曽三川流域産木材の集荷地として認識されていたと見てよい[*29]。

### b　神宮と桑名

神宮にとって、桑名がいかに重要だったのかは、16 世紀初頭の史料から窺える。

〔史料３〕

一、桑名還住之侘事、和田方并山田三方之所望ニて、両宮一祢宜書状長野方へ遣之、案文
態一筆令啓上候、仍桑名之儀、和田殿連〻被申由承候、就其彼在所廻船之津与乍申、取分諸国諸所之
神供御上分已下、従彼所此方へ着岸候、依彼後退、去年已来自余湊便船候、其謂候歟、舟路毎〻非無為、
各失墜幾事候哉。爰元迷惑至極候、桑名緩怠之事者、神忠ニ被閣申、有再住事候者、可目出候、就中、
不限此義、万御鎮座安全之御信深、可為御神忠専一候、弥武運長久・御子孫繁昌可凝懇祈候、尚以和田
殿被申段御同心可目出候、恐〻謹言

三月　日　　是彦　判

長野殿　御宿所　　外宮一祢宜[*30]

この史料では、諸国・諸所からの上納品が桑名から搬送され、神宮へ至るとしている。「此方」とは、大湊・山田を含む宮川河口部と考えられる。ここでいう「諸国」とは前章で見た伊勢湾沿岸の各地や木曽三川遡上ルートによってつながる地域と考えられる。桑名は、諸国から神宮（山田・大湊）へと向かう物資が集荷される場と認識されていたのである。史料の記載から、桑名を出港した神宮関連物資は、安濃津などで中継されることなく、宮川河口部へと直送されていた。

### c　人びとのつながり

明応８（1499）年に岡宮弥五郎の船は「桑名岡宮富丸」として、「神用料米之船」、すなわち「神船」と認識されていた[*31]。文亀２（1502）年にも「桑名岡宮船」[*32]の名が見える。桑名在住と見られる岡宮弥五郎は神宮物資の搬送を担っていた。おそらく彼は桑名で広く廻船業を営む人物で、彼の営みのひとつが「神船」の就航活動であったと考えられる。

天文年間には、桑名から山田へと米類などが貢納品として搬送されたことが知られる[*33]。これも、大きくは「神船」を利用して航行されたのであろう。

大湊と桑名をつなぐ人びとの関係を知ることができる史料に、『大湊古文書』[*34]がある。ここに含まれる「船〻聚銭帳」や「出銭之船数之分」に記載された桑名関係の船を抽出したのが第３表である。

まず、大湊には船宿（小宿）を営む桑名屋甚太郎がいる。桑名出身者ないしは関係者と見てよいだろう。桑名屋は、答志・神島・石鏡など志摩半島各地の船が利用している。桑名屋を媒介に、桑名と志摩半島諸地域は、互いの地域の情報が交換できることになる。

この逆に、桑名屋を利用するのは桑名の船ではないともいえる。そもそも、桑名からの入船があま

り確認できない。桑名屋甚太郎自身が船主で、この帳簿に記載されない方法で往来していたのかも知れない。桑名屋又四郎船は桑名発と見られるが、船宿が記されていない。自身の拠点が大湊で、記載する必要が無かったのかも知れない。なお、彼は入港税として竹を９担出している。竹が商品であることを示す事例として興味深い。

第３表　大湊に出入した桑名関係船

| | 年号 | 西暦 | 船名 | 入出 | 船小宿 | 入港税 | 積載量 | 史料 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 永禄8.11.9 | 1565 | くわなや又四郎舟 | 入 | | 100文〔竹9担〕 | | 「船〃聚銭帳」 |
| 2 | 永禄8.11.9 | 1565 | 答志与三次郎殿舟 | 入 | くわなや甚太郎 | 300文 | | 「船〃聚銭帳」 |
| 3 | 永禄8.11.9 | 1565 | 桑名小新造 | 入 | 信濃屋衛門三郎 | 600文〔分割払〕 | | 「船〃聚銭帳」 |
| 4 | 永禄8.11.21 | 1565 | 神嶋八郎差衛門殿舟 | 入 | くわなや甚太郎 | 100文〔形に七指〕 | | 「船〃聚銭帳」 |
| 5 | 永禄8.12.2 | 1565 | いしか舟 | 入 | くわなや甚太郎 | 100文 | | 「船〃聚銭帳」 |
| 6 | 永禄9.2.30 | 1566 | いしか甚七郎殿 | 入 | くわなや甚太郎 | 100文〔米9升分割払〕 | | 「船〃聚銭帳」 |
| 7 | 天正1.10.15 | 1572 | 蔵一新造 | 出 | くわなや甚太郎 | 一 | 2石 | 「出銭之船数之分」 |
| 8 | 天正1.10.15 | 1572 | ひよし丸 | 出 | くわなや甚太郎 | 一 | 2石 | 「出銭之船数之分」 |

桑名小新造は、その名のとおり桑名の船と見られる。船宿は信濃屋で、前出の信濃苧が桑名で取引されていることを想起すれば、何らかの関連が想定できる。入港税として 600 文（通常の６倍）を支払っており、積載量の大きい船と考えられる。ちなみに、入港税 600 文以上を支払うのは、「船〃聚銭帳」に登場する 132 艘のうち 30 艘である。

天正元（1572）年に桑名へ出船しているのは、織田信長による第２次長島攻めに関する調達と見られる。蔵一新造とひよし丸は、２石積の任務を与えられ出航した。船宿の桑名屋甚太郎は、大湊在住の桑名出身者として役目を担わされたのであろう。

桑名出身者の居住について、星野氏が山田に屋敷を構えていたことが千枝大志氏の研究で判明している[*35]。星野氏は山田に桑名方面の物資を搬送する商人だったようで、天文年間あたりに頻繁な活動が見られる。なお、尾張熱田社の宮司にも星野氏がいる[*36]。両者の関係は不明だが、地域的に近接するため、注意しておきたいと思う。

### d　中世後期における桑名の機能

中世後期の桑名に見られる状況を見てきた。以上のことから、この時期の桑名には複数の機能があったことを指摘できる。

ひとつは、伊勢湾沿岸部や木曽三川遡上ルートにある諸地域の物資が集荷される場という機能である。集荷された物資は、神宮方面や、近江を経て京都・北陸方面へと運ばれた。物資の集散地機能は、桑名の基礎的な機能である。

ふたつめは、近江経由北陸道ルートの帰結点としての機能である。桑名を発した物資は、近江商人によって八風峠・千種峠越えで近江へと至り、京都のほか若狭湾沿岸へも運ばれた。その逆もあり、若狭湾沿岸の物資は、近江を経て桑名へと至る。つまり桑名は、近江・北陸方面に対する情報発信点であり、情報到達点なのである。

三つめは、伊勢湾沿岸地域での機能である。桑名は伊勢湾沿岸部の一湊津という側面を持つ。山田・大湊を核としたこの地域に含まれることにより、桑名を発した物資や情報は、東国方面の太平洋沿岸地域へと拡散される。そしてその逆に、東国方面の物資や情報が当地へともたらされるのである。桑名は、伊勢湾沿岸部に形成された地域構造の一翼を担うことで、この地の情勢により深まりを与えているといえるであろう。

## 4　伊勢湾沿岸部の特質

### a　文献史学による流通経済論と考古学的分布論

これまで見てきた桑名の機能を踏まえ、伊勢湾沿岸部全体が示す中世流通構造を見る。

文献史学を中心に提示されている中世の流通経済論に関しては、最近、千枝大志氏が中世後期を中心とした研究動向を端的にまとめている[*37]。ここからも読み取れるように、中世の流通経済は京都（広

義には畿内）を中心に動いていた、という見解が大勢を占める。古くは、佐々木銀弥氏[*38]や脇田晴子氏[*39]らが提示した「首都市場（流通）圏」や、鈴木敦子が提示した「地域経済圏」[*40]という視座もこれに相当する。つまり、京都（畿内）に求心される流通構造が根幹にあるという観点である。近年提示されている議論も、中央（京都）の圧倒的優位を説くものが多い[*41]。

これとはやや異なる視点を提示しているのが市村高男氏である。市村氏は首都が持つ流通経済への影響力を評価しつつも、それはより限定的（畿内近隣）に見られるもので、地域経済はそれとは別個に展開しており、それらを重層的に合わせたのが日本列島を取り巻く経済構造であるとしている[*42]。

文献史学を中心に提示されてきた中世の流通経済論を概観したが、中央（京都）の優位性を説くものが多いことがわかる。しかし、これは史料の偏在も大きく関係する。やはり何らかの方法によって、中央（京都）は相対化されなければならない。

そこで、考古資料から読み取れる分布論を用いる。考古学では、発掘調査事例を積み上げることで考古学的に分布論の展開が可能となる。

考古資料の分布には様々な要因があるが、大きく分けて、モノそのものが移動することの他に、技術的な系譜の移動もある。あるいは、モノの移動は副次的で、それを伴った人の移動が主要なこともある。これらは、厳密に区分した検討を深化させつつ、それらを総合的に評価することも合わせて進めなければならない。というのも、「流通」や「経済」は、とかくシステム・構造といった方面から検証が加えられるため、議論が硬直しがちだが、事の本質は人の移動や関係性にある。この観点に立てば、技術伝達や人の移動、あるいは同じ様相を呈する土器群が見られるエリアとは、ある種の文化的な共通性を有したエリアと把握でき、それはすなわち流通・経済の基礎と認識できると考えられる。

伊勢湾沿岸部に特徴的な土器を素材として、この状況を見よう[*43]。

### b　考古学的分布論からの検証

**中世前期＝南伊勢系土師器**　南伊勢系土師器は、古代以来（起源は古墳時代後期まで遡る）中世を経て近世・近代・現代へと伝統された土師器である。南伊勢地域（度会郡有爾郷）で生産が続けられた。神宮と関係深いが、土器工人はそれに従属しつつも、手枷足枷状態ではない[*44]。

南伊勢系土師器の分布を第１図に示した[*45]。生産地の南伊勢地域に濃密で、それ以外の伊勢湾沿岸部にも一定量分布している。南は、熊野三山が鎮座する那智あたりまで及ぶ。東は房総半島までの太平洋沿岸に広く分布する。13 世紀代の鎌倉では、とくに多くの個体が確認されている。鎌倉の「都市性」に拠るものであろう。また、舟運の関係であろうか、九州（豊前臼杵、野村台遺跡）や東北（陸奥多賀城、新田遺跡）での出土が興味深い。

**第１図　南伊勢系土師器の列島分布**

南伊勢系土師器の分布からは、伊勢湾沿岸部を中心に、広く熊野・関東までの範囲が一定の文化的共通性を持つ地域として見ることができる。

**中世前期＝山茶碗**　山茶碗は古代の瓷器に由来し、瀬戸・知多・渥美などの東海諸窯で生産された簡素な陶器碗である。東海地域独自の焼き物と言ってよいだろう。概ね 12 世紀代から 13 世紀中葉頃をピークに生産され、14 世紀代以降は一部を除き急減する。

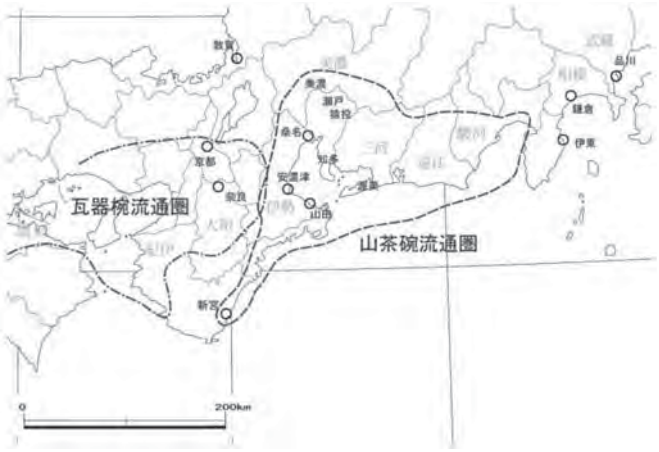
山茶碗の出土遺跡をもとに「山茶碗流通圏」を示したのが第２図である[*46]。南伊勢系土師器の分布（第

１図）と極めて類似していることが読み取れるであろう。東の鎌倉や、南の那智では、やはり多くの個体が確認されている。

参考に、第２図には瓦器椀の分布も示した[*47]。瓦器椀とは、外面を燻し焼成した軟質の椀形土器である。「山茶碗流通圏」と「瓦器椀流通圏」とは、伊勢山間部で若干の重複を見せるものの、ほとんど重ならないことがわかる。

**中世後期＝「地域型」鍋**　中世後期の事例として、土師器煮沸具類に見る「地域型」の分布を提示する（第３図）。中世前期と同様、南伊勢系鍋は伊勢南部を中心に濃厚な分布を見せるが、伊勢北部には中北勢系、遠江には「遠江型」などの地域色が発現している。ただし注意したいのは、これらの地域型はいずれも南伊勢系鍋の技術的な影響下で成立している点である。地域の独自型を作りながらも、大局的には南伊勢系の影響下にあるというのが中世後期の特徴である。

第１図には、中世後期に南伊勢系鍋が搬出された地点も示している。その範囲は、中世前期の分布圏内に収まっている。




**第２図　山茶碗と瓦器椀の流通圏**

**第３図　中世後期の南伊勢系鍋と地域型煮沸土器**

## 考古学的分布論から見た「経済圏」

南伊勢系土師器と山茶碗という、伊勢湾沿岸部に特徴的な土器の分布を見た。これらは通常の集落遺跡からも数多く確認される土器なので、基礎的な地域性を見るためには文献史料以上に雄弁である。すなわち、この土器分布が示すエリアこそ、伊勢湾沿岸部から発信される情報到達域＝経済圏に他ならないのである。

山茶碗と瓦器椀の分布を改めて見ておきたい（第２図）。両者は部分的に重複するが、それぞれの領域は独自である。この両者に主･従の関係は見出せる筈もない。いわんや、山茶碗流通圏が瓦器流通圏の「補完」を果たしてなどいない[*48]。基礎データを見れば、中央（京都）の経済圏が他よりも優越しているという状況を見出すことは不可能である。

**中世後期に見る土師器の「地域型」形成**

中世前期と異なり、中世後期には「地域型」煮沸土器が生成される。ここから、中世前期の方がより求心性を持ち、中世後期は分散的になるという見方も可能に見える。中世前期の南伊勢系鍋分布は神宮（神宮領）との関係もあると考えている[*49]ので、中世後期の求心性は、確かに下がっているといえる。

しかし､東海の各地に成立した「地域型」煮沸土器は､土器の製作手法は明らかに南伊勢系土師器（鍋）の影響を受けている。地域が生成（再生産）される背景には、やはり中世前期以来の地域関係（＝流通圏）が関与していると見られる。つまり、各地域の独自性発現と、大きな枠組みとしての地域関係（＝流通圏）とは相反するものではないと見るべきであろう。

### c　伊勢湾沿岸部から「中央」を見る

考古資料から見た以上のような伊勢湾岸地域の特徴は、中世の流通経済論とどのように関係するのだろうか。

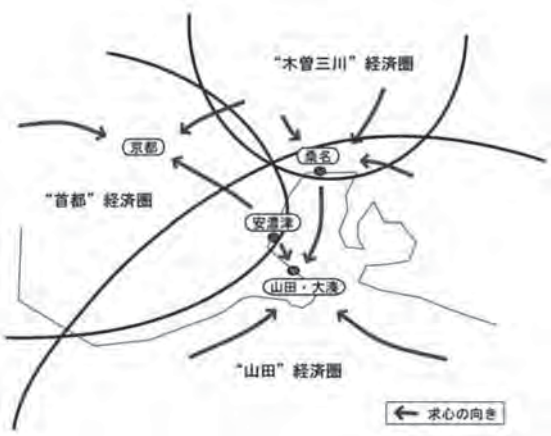
まず指摘できるのは、中央（京都）が絶対的に優位な流通経済構造など形成されていなかったということである。言うまでもなく中央（京都）には朝廷があり、室町期には足利幕府が所在した。そういう意味で、情報の発信点として中央（京都）の優位性は動かないだろう。しかし、だからといって人の生活基盤である流通経済までもがそこに求心すると見るのは乱暴である。例えば伊勢湾沿岸部に見られる流通・経済のベクトルが、兎にも角にも中央（京都）を向いていると、何を持って言えるのだろうか。

伊勢湾沿岸部では、中央（京都）の関与する在所が安濃津である。中央求心構造論になぞらえると、中央に接続する場が安濃津ならば、伊勢湾沿岸部の中心核も安濃津でなければならない。中世前期の安濃津は、神宮神人等による交易の拠点であり、山茶碗類の集散地でもある[*50]ことから、有力な流通拠点と見られる。しかし、安濃津が同時期の桑名や山田を凌ぐ機能を有していたことを示す資料はない。岡野友彦氏に言わせると、安濃津は「神宮の・神人による・神宮のための港」[*51]なので、そこに神宮界隈（山田）以上の機能を措定することはできない。中世後期の安濃津は、湊津に加え、陸上交通・政治・宗教など、様々な機能を加えており、明確な「都市的発達」が見られる[*52]。しかし、山田・大湊もまた「都市的発展」をしていることは、千枝氏や小林秀氏[*53]らが示した一連の論考から明らかである。

同じことは桑名についてもいえる。中世を通じ、桑名に「都市的発達」のあったことは間違いなかろうが、伊勢湾沿岸全域の絶対的求心点ではない。

先述の考古学的分布論から、伊勢湾沿岸部を核とした「経済圏」は、いわゆる「東海地域」を包摂し、関東に及んでいる。また、山田・宇治を中心に活動する神宮御師が列島規模の活動を行っていることもよく知られている[*54]。ここに中央（京都）への求心・従属を見出すことはできない。

伊勢湾沿岸部の流通経済構造には、以上のように山田を最大核とする関係が形成されていた。そしてそこには、山田・大湊とは異なる役割を担う桑名・安濃津が含まれていた。安濃津には京都との、桑名には木曽三川流域の中核地機能のほか、近江経由北陸方面との接続という要素がある。そして安濃津や桑名は、それぞれに独自の領域をも有している。つまり、山田を中核とした伊勢湾沿岸部は、中央（京都）とは一定の関係を有しつつも、独自に展開したと考えるのが妥当なのである（第４図）。これをここでは「山田経済圏」と呼ぶ。これは、「首都経済圏」でも、それを補完する「地域経済圏」でもない、いわば第三極の経済圏である。よって、中央（京都）を絶対視する論は再考されるべきだと考える。伊勢湾沿岸部の状況は、先述の市村氏が描いたあり方に最も近いといえるであろう。




第４図　流通構造模式図

なお、近年提示されている岡野氏の「東海地域経済圏」[*55]について触れておく。岡野氏は筆者と同様に山田を核とした経済圏を想定し、中世前期の山田は「権門都市」としてその役目を果たし、中世後期以降は参宮客を当て込んだ「門前町」山田の機能を重視し、神宮の領域として「東海地域経済圏」を措定する。このなかで、筆者が示した「山田経済圏」は中世後期のものとして扱われているが、前述の考古学的分布論で示したとおり、この大枠は中世前期には成立しており、さらに関東や熊野方面にも関与すると見ている。したがって、「東海」という括りで論を展開することには、今ひとつ抵抗を感じざるを得ない。

さらに付言すれば、山田への収斂はある意味必然なのかも知れないが、東海地域を含む太平洋沿岸部の地域関係は古墳時代以来のものと考えている。中世の状況とは、それこそいきなり中世に成立したのではなく、蓄積された歴史的関係の一断面である。安濃津を「神宮の・神人による・神宮のための港」とするのは、この一断面を一方向から見た解答としてのみ正しい。

さて、「山田経済圏」と同質のものは、博多を中心とした経済圏をはじめ他にもあると思われる。また、日本海沿岸各地も「首都経済圏」を補完するものとは考えにくい。市村氏の指摘のとおり、日本列島の経済構造とは、並列的に存在する「首都」と「地域」が、相互的に連携を保ちながら一定のまとまりをつくっているものだと考える。

## おわりに　～課題と展望

日本列島は一定の経済圏と把握できると考えられる。したがって、本稿で検討した伊勢湾沿岸地域もその一部でしかない。しかし、同じ意味で中央（京都）もそうである。中世前期の鎌倉・京都、中世後期の京都に対し、過度の絶対視は危険である。どのような地域であっても、常に相対的な関係にあることを念頭に置く必要がある。

伊勢湾沿岸部の地域情勢を以上のような視角から見れば、織豊期から江戸期にかけての動向に対しても一定の展望が開ける。この時期の課題は、岡野友彦氏が提示した「家康はなぜ江戸を選んだのか」の言[*56]に集約される。結論を言えば、これは徳川家康による中央（京都）相対化のための「山田経済圏」の利用ではないかと思う。その効果は17世紀を通じて次第に効果を発揮し、18世紀に完成を見るのである[*57]。

通史的に日本列島の要地といえる伊勢湾沿岸部は、まだまだ解明されるべき課題が多い。今後も、多様な検討を進めることによって、これまでは見えなかった新たな日本列島史が描けるものと確信している。本報告の展望として提示しておきたい。

【註】

＊１　京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成和名類従抄』（臨川書店、1968年）

＊２「近衛家文書」（網野善彦「中世の桑名について」（『名古屋大学文学部研究論集』25、1978年。のち同氏著『日本中世都市の世界』（筑摩書房、1996年）に再録。）

＊３　奥野高広『皇室御経済史の研究』（畝傍書房、1942年）、稲本紀昭「室町幕府と伊勢国ー御料所を通じてー」（『三重大学教育学部研究紀要（人文科学）』34、1983年）。

＊４　『尊卑分脈』（第四篇、国史大系）。

＊５　伊勢平氏貞衡流のみが安濃津・桑名といった苗字の地を名乗ることに対しては、高橋昌明が注意を喚起している（高橋『清盛以前～伊勢平氏の興隆～』平凡社、1984年）ことを付言しておく。また、伊勢平氏庶流に関しては、近年、野口実によって詳細な検討がなされている（野口「院政期における伊勢平氏庶流」・「院政期における伊勢平氏庶流（補遺）」『研究紀要』16・17、京都女子大学宗教・文化研究所、2003・04年）。

＊６　福島金治「金沢北条氏・称名寺の所領経営と在地社会」（『年報中世史研究』26、2001年）。

＊７　豊田武『増訂中世日本商業史の研究』（岩波書店、1952年）、徳田釼一『中世に於ける水運の発達』（章華社、1936年）。

＊８　前掲網野氏註(2)文献。

＊９　『証如上人日記』（『石山本願寺日記』上巻、清文堂、1984年復刻版再刊）。以下、『証如上人日記』はこの文献に拠る。

＊10　『証如上人日記』天文８年３月９日条。

＊11　『証如上人日記』天文８年３月10日条。

＊12　『証如上人日記』天文12年10月17～18日条に、桑名川尻の件で広橋とのやりとりが見える。禁裏領の代官としての任務は断りつつも、実際に願証寺は桑名に対して大きな影響力を有していたと見ておくべきであろう。
＊13　重松明久「織田政権の成長と長島一揆」（同氏著『中世真宗思想の研究』吉川弘文館、1973年）など。
＊14　稲本紀昭「織田信長と長島一揆」（『日本国家の史的特質　近世・近代』思文閣、1995年）、播磨良紀「戦国期伊勢・尾張国境地域の歴史的展開」（『年報中世史研究』38、2013年）。
＊15　中世の津島については、山村亜希「中世津島の景観とその変遷」（『愛知県立大学文学部論集・日本文化学科編』53、2005年）に詳しい。
＊16　『大乗院寺社雑事記』５。
＊17　中村研編『今堀日吉神社文書集成』（雄山閣、1981年）。
＊18　前掲中村研編『今堀日吉神社文書集成』および、藤田裕嗣「交通路と小幡商業」（『五個荘町史』第１巻古代・中世、1992年）など。
＊19　永原慶二『新・木綿以前のこと』（中公新書、1990年）、同氏『苧麻・絹・木綿の社会史』（吉川弘文館、2004年）。
＊20　前掲藤田氏註(18)文献。
＊21　前掲播磨氏註(14)文献。
＊22　飯田良一「文明年間における伊勢湾の警固と廻船」（『三重県史研究』４、1988年）。
＊23　大西源一『大神宮史要』（平凡社、1960年）。
＊24　神宮司庁編『神宮御杣山記録』一（1974年）。
＊25　木村政生『神宮御杣山の変遷に関する研究』（国書刊行会、2001年）。
＊26　「守則長官引付」60（『三重県史』資料編中世一上）。
＊27　『永禄記』（神宮司庁偏『神宮遷宮記』四、1932年）。
＊28　「円覚寺文書」（『鎌倉市史』史料編第二、1956年）所収の応永30～31年にかけての史料中から窺える。
＊29　このことについて、田村憲美は前掲「円覚寺文書」を根拠に、桑名と鎌倉間に材木搬送にかかる恒常的な海上ルートが存在していたとする。田村「中世『材木』の地域社会論」（『日本史研究』488、2003年）。
＊30　「守則長官引付」56（『三重県史』中世１上）。
＊31　「明応永正宮務記」21（『三重県史』資料編中世１上）。
＊32　「明応三年引付」32（『三重県史』資料編中世１上）。
＊33　荒木田守武の記した『私日記』・『天文日記』からその状況が知れる。このことについては、稲本紀昭「神宮文庫蔵『私日記』について」（『三重県史研究』11、1995年）、同「荒木田守武『神税日記』」（『史窓』54、京都女子大学、1997年）、および千枝大志「中近世移行期伊勢山田における近地域間構造」（『都市をつなぐ－中世都市研究13』新人物往来社、2007年）を参照。
＊34　『大湊古文書』（『三重県史』資料編中世２）。
＊35　前掲千枝氏註(33)文献。
＊36　星野加奈「熱田大宮司星野氏の研究」（『皇學館史学』27、2012年）。
＊37　千枝大志「中世後期の貨幣と流通」（『岩波講座日本歴史』第８巻中世３、2014年）。
＊38　佐々木銀弥『中世商品流通史の研究』（法政大学出版局、1972年）。
＊39　脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』（お茶の水書房、1969年）。
＊40　鈴木敦子『日本中世社会の流通構造』（校倉書房、2000年）。
＊41　早島大祐『首都の経済と室町幕府』（吉川弘文館、2006年）、仁木宏『京都の都市共同体と権力』（思文閣出版、2010年）など。
＊42　市村高男「中世西日本における流通と海運」（『中世西日本の流通と交通』高志書院、2004年）。
＊43　桑名では桑名城下町の調査成果がある（桑名市教育委員会『桑名城下町遺跡発掘調査報告書　外堀三〇地点』2004年）。同書によると、中世前期では南伊勢系土師器のほか尾張産陶器類が、中世後期では中北勢系土師器・尾張産土師器類のほか、京都系瓦質鍋（模倣？）なども見られる。
＊44　拙稿「伊勢国有爾郷の中世土器生産者像」（『研究紀要』20、三重県埋蔵文化財センター、2011年）。
＊45　作図にあたっては、拙稿「南伊勢系の土師器と中世土器工人」（『研究紀要』第１号、三重県埋蔵文化

財センター、1991年）および拙著『中世伊勢湾岸の津湊と地域構造』岩田書院、2007年）を基に加筆した。

＊46　作図にあたっては、藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』（高志書院、2013年）および拙稿「境界・周縁としての熊野」（『古代中世の教会意識と文化交流』勉誠出版、2011年）を基にした。

＊47　作図にあたっては、森島康雄「瓦器－編年と技術伝播－」（『中世窯業の諸相』発表要旨集、全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会、2005年）を参照した。

＊48　脇田晴子氏は、地域経済圏を重視しつつも、それは首都経済圏を「補完」するもの、としている（前掲脇田氏註(39)文献）。

＊49　前掲拙稿註(45)文献。

＊50　拙著『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』（岩田書院、2007年）。

＊51　岡野友彦「伊勢中世都市の歴史的位置づけ」（前掲『都市をつなぐ－中世都市研究13』）。

＊52　前掲拙著註(50)文献。

＊53　小林秀「中世都市山田の形成とその特質」（前掲『都市をつなぐ－中世都市研究13』）。

＊54　西山克『道者と地下人ー中世末期の伊勢ー』（吉川弘文館、1987年）

＊55　岡野友彦「権門都市宇治・山田と地域経済圏」（『年報中世史研究』38、2013年）。

＊56　岡野友彦『家康はなぜ江戸を選んだのか』（教育出版、1999年）

＊57　このことについては、拙稿「伊勢湾・熊野灘沿岸部の伊豆石製品と近世太平洋海運」（『地域社会における藩の刻印』清文堂出版、2014年）を参照されたい。

# 報告 3

「木曽三川流域における浄土真宗の展開」

安藤　弥氏（同朋大学）

# 報告３
# 「木曾三川流域における浄土真宗の展開」

安藤　弥氏（同朋大学）

## はじめに

○本報告の課題：伊勢・尾張・美濃三国にかかわる木曾三川（濃尾三川＝長良川・木曾川・揖斐川）流域における浄土真宗勢力（ここでは本願寺教団に絞る）の歴史的展開を見つつ、とりわけ戦国・織豊期にかけての〈長島願証寺の滅亡～桑名本統寺（今寺）の成立〉の歴史的意義を探る。

○先行研究の到達点と課題：戦前の寺誌（願証寺・本統寺）、一向一揆研究と地域真宗史研究（由緒史料の基礎分析、法宝物史料の調査研究）、地域史・自治体史関連の研究→意味ある蓄積の一方でいくつかの問題点（護法史観･宗派史観の問題、一向一揆評価の転換、研究者の宗教観、関係史料の喪失･情報確保、現自治体の境界区分による陥穽など）

⇒東海地域（環伊勢湾世界）全体を見渡す視点、宗教勢力独自の地域性という視点などを意識しつつ、以下３節に分けて試論する。

## （１）木曾三川流域の浄土真宗

### １．初期真宗「門流」の展開

○親鸞没後の初期真宗「門流」集団：14-15ｃ関東から三河へ、知多半島･伊勢湾を経て木曾三川流域へ（専信房専海門流、光信房源海門流（荒木門徒）など…金泥九字名号系）、一方で信越方面からの展開も（横曽根門流など…金泥十字名号系）【史料１】【図表１】

○本願寺覚如・存覚期の主な地域拠点：知多大野（常滑市）…『教行信証六要鈔』奥書、江吉良・真桑・開田…『存覚袖日記』、金原･松倉…法宝物裏書（ただし記録史料情報）→さらに上記初期法宝物の点在。

### ２．戦国期本願寺「教団」の形成

○本願寺蓮如（1415-1499）の宗教活動：名号・御文等を用いた民衆布教→東海各地域に多くの来訪伝承、多数の下付法宝物が存在。三河では寛正２年（1461）佐々木上宮寺に十字名号本尊、美濃・尾張では寛正５年（1464）河野門徒へ十字名号本尊が初見。伊勢は少し遅れて実如期以降、道場本尊の下付（下述「秘事法門」事件の影響のため）。

○三河三か寺（佐々木上宮寺・野寺本證寺・針崎勝鬘寺）末の木曾三川流域における展開：文明 16 年（1484）『如光弟子帳』にみる上宮寺門末の分布（伊勢長枝＝多度町香取）、文明３年（1471）～９年（1477）「秘事法門」事件（『蓮如御文』）…本證寺同宿の誓珍ら、美濃脇田江西願寺を拠点に勢尾濃の門徒ら 10 名に異なる教義を伝える。

○道場本尊（方便法身尊像＝阿弥陀如来絵像）の下付：15-16ｃ蓮如・実如・証如期の各地域的状況→伊勢では「興正寺門徒三州柳堂阿弥陀寺下」道場の存在に注目（阿弥陀寺は明応２年（1493）以前に桑名郡枡田庄今津に移転し、天文６・７年（1537・8）の間に法盛寺（桑名市）に寺号変更）。興正寺系では尾張海西郡興善寺にも注目。

○『天文日記』等にみえる木曾三川流域：一国単位ではなく隔地的･各地的な紐帯･結集が見出される（大

坂本願寺での卅日番衆や斎頭役の勤仕状況）→辰田西勝寺門徒相論、小林光明寺門徒と足近万福寺門徒の共同斎頭役、本證寺・報土寺本末相論、美濃・尾張河野門徒衆の卅日番役勤仕（洪水被害）など**【史料２】**

⇒〔小結〕初期真宗の「門流」形態から、蓮如による本願寺「教団」への組織編成へと展開。その過程で「秘事法門」事件勃発。また、本願寺直参化（従来の本末関係の解消を狙う相論勃発）が各地域門徒団で進む。一国規模のまとまりをもちにくい境界的、多面的様相を呈する。（→そこに長島願証寺・桑名本統寺が建立されるその実態と意味は？）

## （２）長島願証寺

### １．願証寺の成立と展開

○明応 10 年（1501・文亀元）までに蓮如六男蓮淳が入って香取庄中郷杉江（現長良川底）に建立…前提に香取法泉寺・辰田西勝寺の存在。背景には「秘事法門」事件、また明応９年（1500）伊勢一向宗蜂起？→いずれにせよ、永正７年（1510）ころ実円（実如息男）が入寺する三河本宗寺より早い。

○永正８年（1511）以前には蓮淳二男実恵が住職…一門衆寺院として地域教団の与力護持を受け、それを統括する役割が求められる。当初は伊勢のみの与力、のち天文５年（1536）ころには伊勢・美濃・尾張三域の与力となるが、実際には近隣寺院のみの限定的なものであった可能性が高い（蓮如期に本願寺直参化した寺院が多く二重負荷に難）。

○天文４年（1535）光応寺蓮淳、三河勝鬘寺・本證寺に書状を送り、願証寺の指導のもと蓮如御文に基づいた活動をするよう伝える**【史料３】**。天文５年（1536）実恵没、証恵が継職。このころ南郷へ寺基移転という。願証寺証恵、天文年間に大坂本願寺でたびたび報恩講出仕、巡讃等を勤める。

○永禄３年（1560）、前年の本願寺「門跡成」を受け、三河土呂本宗寺（播磨英賀本徳寺）証専、河内久宝寺顕証寺証淳とともに、「院家」に補される。本願寺「門跡」の地方的権威として「院家」願証寺が存立。永禄７年（1564）証恵没、証意が継職（この年、三河一向一揆敗北）。元亀２年（1571）証意没、佐堯（法名不明）が継職**【図表２】**。

### ２．長島一向一揆

○元亀元年（1570）顕如による法敵信長打倒の檄文（石山合戦の開始）に応じ、伊勢長島一向一揆が蜂起：小木江城を攻め、織田信興を自害させる→翌年、信長の第一次長島攻め。氏家直元の戦死、柴田勝家の負傷（…一揆勢による赦免無視）。一揆勢数百人も討死（証意も？）→さらにその翌年、一揆勢、尾張・美濃の通路遮断などを行う。

○天正元年（1573）信長の第二次長島攻め：信長勢による北伊勢の制圧。信長方の伊勢国司北畠具房、長島攻めのため、大湊衆に桑名までの出船を命じる→大湊船は桑名まで出るも帰港し、再出船命令になかなか応じない（長島と連携しているため、対立回避）→美濃に帰陣する信長勢を一揆勢が攻める。

○天正二年（1574）信長の第三次長島攻め：陸路三方から大攻勢をかけ、海上封鎖。長島城内では餓死者が続出し、大鳥居から脱出を試みた人びとを惨殺。降伏勧告をうけ、船で退出する一揆勢をも攻撃、さらに二万人を焼き殺す。願証寺院家、下間父子、平尾坊主父子三人らが船で逃げるのを捕えて斬首**【史料４】**。実恵室藤向 81 歳で入水という。

○長島一向一揆の歴史的性格：『当代記』「此七月十四日、信長尾州の河内へ〈後号長島〉被取懸、是一向宗之寺内也、大河四方に有之、人馬行歩不安之処置也、此夏秋旱天之間、如貴意被相攻」→本願寺「院家」である願証寺の「寺内」に拠る門徒民衆。佐々木上宮寺父子らの転戦（苅安賀で戦死）。惣国一揆になれなかった実態（信長方寺院も存在）。

⇒［小結］木曾三川流域の河口部に位置する河内・長島に本願寺教団の一門衆（のちに院家）寺院願証

寺が成立。伊勢・尾張・美濃三国の教団統括を担うが、実際には北伊勢・南濃・尾張の一部のみが実効勢力圏か。ために長島一向一揆は三国の有力寺院による願証寺護持の動きが弱く、孤立的状況下での戦闘（とはいえ、相当程度の戦力を有した）。

## （3）桑名本統寺

**1．本統寺の成立―由緒と史実 【史料5】**

○「今寺」創立伝承：元亀天正の石山合戦時、要衝桑名に伊勢・尾張・美濃の門末の寄合所を構え、「今寺」と称したという…願証寺・長島一向一揆との前後関係を考えると疑問。一揆敗北・願証寺退転以後の動向、在地状況の検討が必要→天正12年（1584）小牧・長久手の戦いにおける本願寺門末の軍事的行動（闕所地回復が目的）、その後の在地還住？

○本願寺教如による御坊建立の動き：再興した願証寺が准如（→西本願寺）方、慶長6年（1601）本多忠勝の桑名入封も背景か。教如（→東本願寺）方の伊勢･尾張･美濃三国の門末を統括する御坊が（願証寺にかわって）必要→香取法泉寺・桑名西勝寺・御崎真宗寺らの与力による桑名御坊建立が実態か。御堂衆西福寺の北伊勢教化伝承も。

○長姫（教如息女・教証院如頓）の入寺をめぐる由緒：7歳で桑名三崎道場に入り寺務代となり、17歳で花山院忠長に嫁ぎ二子をなす（長子は公海）。忠長流刑後、加賀小松勧帰寺玄誓に配され、桑名御坊に再住。玄誓が寺務をとるという。公海の請で江戸寛永寺の庵室に転じ（現教証寺）、寛永20年（1643）養子宣慧危篤により桑名帰還。同年没。

○桑名本統寺の歴代：勧帰寺玄誓と教証院如頓（長姫＝初代）の桑名御坊入寺（慶長14年・1609以降）→2代寿量院宣慧（東本願寺十三代宣如長男・庶子）→3代慧浄院琢慧（東本願寺十四代琢如二男）…慶安2年（1649）寺号「本統寺」公称。貞享3年（1686）本堂再建（豪商山田彦左衛門の寄進）。4代深広院常智以降、本山連枝の入寺停止→輪番制。

**2．桑名本統寺の与力寺院・地域的基盤をめぐって**

○桑名御坊は当初、願証寺の位置を継承すべく伊勢・尾張・美濃三国の録所とされたが、尾張は荷之上興善寺に教如息女が入ってその役割を担い、のち名古屋御坊が成立。美濃にも平尾真徳寺（願証寺由緒）の掛所（現大垣別院）、岐阜の小熊御坊（現岐阜別院）などが成立し、桑名御坊の地盤はほぼ伊勢北部のみに限定（南伊勢は播磨船場本徳寺）。

○桑名御坊の与力寺院･地域：香取法泉寺（旧桑名？･旧杉江？）･桑名西勝寺（旧辰田）･高須真宗寺（旧御崎）をはじめとする伊勢地域門末→ただし南濃高須地域は本統寺崇敬地域（中世以来の関係が存続したとみられる）：元和以降に御崎真宗寺が移転。幕末に成立する高須御坊二恩寺は当初、桑名御坊本統寺の掛所的存在。

○御崎（三崎）真宗寺：三崎は長島東方にも三崎の地名。当初そこに所在し桑名に移った可能性も。所蔵法宝物は実如筆六字名号、慶長4年（1599）証如影像、慶長10年（1605）親鸞影像、宣如裏書方便法身尊像など。元和6年（1620）太子・七高僧の裏書の地名も伊勢桑名**【史料6】**…真宗寺門徒早川家は方便法身尊形裏書（教如筆）所蔵。

## おわりに

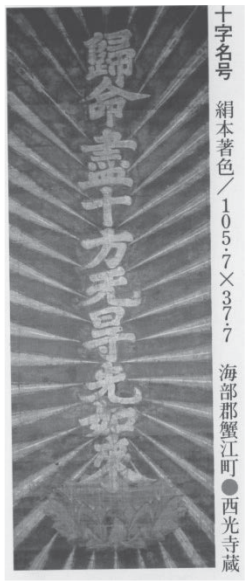
○課題：真宗史料調査（寺院・門徒宅）の必要性、東本願寺教如と木曾三川流域への注目

○展望：真宗勢力の展開から見た木曾三川流域・環伊勢湾世界、そして桑名の歴史

〔主要参考文献〕
梧　北涯（桑名別院輪番）『本統寺誌』（1914年）
佐々木芳雄『願証寺誌』（1936年）
重松明久「織田政権の成長と長島一揆」（同『中世真宗思想の研究』吉川弘文館、1973年。初出1953年）
金子昭弐「濃尾平野に於ける本願寺教団の発展と一向一揆（上・下）」（『日本歴史』第161・162号、1961年）
織田顕信「佐々木如光とその周辺」（同『真宗教団史の基礎的研究』法蔵館、2008年。初出1965年）
『海津町史』史料編２（海津町、1970年）
青木忠夫「河野門徒の基礎的研究」（同『本願寺教団の展開　戦国期から近世へ』（法藏館、2003年。初出1987年）
『名古屋別院史』通史編（真宗大谷派名古屋別院、1990年）
小島惠昭「木曾三川流域における蓮如教団」（『蓮如上人研究会会誌』第6号、1992年）
稲本紀昭「織田信長と長島一揆」（朝尾直弘教授退官記念会編『日本国家の史的特質　近世・近代』思文閣出版、1995年）
中野和之「濃尾勢地域における親鸞伝承と門徒団（上・下）」（『龍谷史壇』107・108、1997年）
小島惠昭「美濃・尾張地域の中世真宗史」（『講座蓮如』第6巻、平凡社、1997年）
『蓮如上人と尾張』（真宗大谷派名古屋教区教化センター研究報告、1998年）
中野和之「願証寺の成立―由緒書の比較検討を中心に―」（『真宗研究』第42輯、1999年）
中野和之「「長島願証寺由来書」をめぐって―「願証寺の成立」補遺―」（『仏教史研究』第37号、2000年）
中野和之「辰田門徒考」（愛知教育大学歴史学会『歴史研究』第45・46合併号、2000年）
『愛知県史』資料編11織豊１（愛知県、2003年）「特集　長島一向一揆」
脊古真哉「郡上安養寺の成立と展開―初期真宗門流から本願寺教団への一例―」（水野柳太郎編『日本古代の史料と制度』岩田書院、2004年）
金龍　静『一向一揆論』（吉川弘文館、2004年）第七章「東海三域の一向衆と長島一揆」
播磨良紀「長島一向一揆と尾張」（『愛知県史研究』第9号、2005年）
太田光俊「小牧・長久手の戦いにおける本願寺門末―北伊勢の事例から―」（藤田達生編『近世成立期の大規模戦争　戦場論下』岩田書院、2006年）
『新編安城市史』通史編１原始・古代・中世（安城市、2007年…安藤執筆分）
中野和之「願証寺の系譜」（新行紀一編『戦国期の真宗と一向一揆』吉川弘文館、2010年）
播磨良紀「織田信長の長島一向一揆攻めと「根切」」（同上）
木下　聡「明応九年の伊勢の一向宗蜂起」（『戦国史研究』第66号「羅針盤」、2013年）
石神教親「「長島一向一揆」再考」（『織豊期研究』第16号、2014年）
『続・本願寺教如と三河・尾張・美濃』（同朋大学仏教文化研究所2014年度後期展示図録）
拙稿「中世知多半島地域における真宗勢力の展開」（『愛知県史研究』第12号、2008年）
拙稿「東海地域における真宗勢力の展開」（『年報中世史研究』第38号、2013年）
拙稿「三河と播磨をつなぐ南伊勢の真宗」（『真宗研究』第58輯、2014年）

## 【報告3・資料編】

**【史料1】** 金泥十字名号・金泥九字名号
（『蓮如上人と尾張』14ページより）




十字名号　絹本著色／105·7×37·7　海部郡蟹江町●西光寺蔵

九字名号　絹本著色／113·7×36·1　海部郡甚目寺町●願正寺蔵

**【図表1】** 木曾三川流域金泥名号所在一覧
（『講座蓮如』第六巻小島論文より）

| |
|---|
| ○金泥十字名号　…　本正寺（大垣市墨俣）、慶善寺（岐阜市六条東）、願誓寺（岐阜市西野町）、本願寺派岐阜別院（岐阜市西野町）、西順寺（本巣郡北方町）、安養寺（郡上市八幡町）、敬念寺（岐阜市西荘）、大谷派岐阜別院（岐阜市大門町）、円命寺（本巣市上保）、西光寺（海部郡蟹江町）、長善寺（名古屋市西区）、願念寺（美濃市鍛冶屋町）、興徳寺（名古屋市熱田区）、円福寺（名古屋市西区）、珉光院（名古屋市名東区）、西来寺（名古屋市南区） |
| ○金泥九字名号　…　祐正寺（名古屋市中川区）、西生寺（名古屋市中川区）、願正寺（あま市（甚目寺町）森）、法信寺（一宮市北今）、西方寺（清須市西枇杷島町）、崇覚寺（名古屋市中区）、浄性寺（岐阜市茜部本郷）、無量寿寺（半田市成岩本町）、眺景寺（日進市梅森台）、円勝寺（本巣市金原）、本龍寺（犬山市犬山）、等覚坊（大垣市新町）、光明寺（常滑市大野町）、最乗寺（岐阜市寺田）、成信坊（津島市本町）、光耀寺（愛西市赤目） |
| ○金泥六字名号　…　友徳寺（岐阜県揖斐川郡坂内） |

**【史料2】**『天文日記』（『真宗史料集成』第三巻）

〔天文五年（1536）二月八日条〕

同日　去四日、辰田門徒より人のほせし其返事只今申出候、其様体ハ坊こそ曲事共候条、放門徒候也、彼道場にハ御影、前住御影御出候事候間、勤行已下無懈怠、幸門徒之坊主分之ものなと在之事候間、勤行をもさせ候へく候と申付候也、

〔天文五年（1536）四月十九日条〕

十九日　勢州辰田西勝寺門徒へ開山并其外御影共、又本尊ものほせ候へく候、但遠路之儀候間、如何候条、長嶋坊へあつけ候へきよし申出也、

〔天文五年（1536）五月二十七日条〕

一、来月二日之斎、小林光明寺并足近此衆頭候間、小林上洛せしめつとめ候へき所存候処、国不忩之条、先延引候て不可然之由、両織田申候間、不任心中儀候、然而国相静候者、重而可罷上之由申、同宿のほせ候、足近衆よりハ人々不上候、（中略）

〔天文五年（1536）六月二日条〕

一、今日之斎ハ小林・足近両人也、然者当年如佳例可勤之由、従先日申つとめ候、汁二ツ、菜八ツ、果子五種、

〔天文十年（1541）八月十九日条〕

△一、本證寺与報土寺、就本末相論事、去春以来、左右方捧訴状訖、仍唯今令裁断之、

△一、報土寺奉安之本尊ニ、前住御判を被加候段計ハ雖難成証跡、惣而事委被書註候筆跡、於前住者不可有之上者、是又可為支証也、

△一、対本證寺、報土寺不勤諸役之上者、直参之儀者顕著也、

△一、於出口、蓮如之時、報土寺令直参候、其刻、本證寺へ報土寺不致其届之段者、已出口へ参候時、本證寺ハ就濃州之儀、蒙勘気之間、報土寺ハ乍門徒、親類事候間、無対面之条、種々懇望申、本證寺へ音信仕候間敷之由、堅申定直参候時者、不能案内之段、尤候、右、三ヶ条之趣、本證寺、報土寺へ以真頼申付候、本證寺も納得之由、言上候也、

△一、為報土寺礼五百疋持参候、（中略）

〔天文二十一年（1552）十月二日条〕

一、両川野依水損、餓死之輩多之由候、

一、毎年灯明料七月五百疋雖上之候、依餓死并乱世、唯今四百足〈ミノ川ノ二百足／尾わり河野二百足〉上之、

一、頭銭毎年八百足、御明十足、志宮足雖出之、依不相調候、六百五十足〈自尾張二貫五百／自美濃三貫五百〉出之、御明并志不出之、

**【史料3】** 蓮淳書状（『新編安城市史』資料編古代中世）

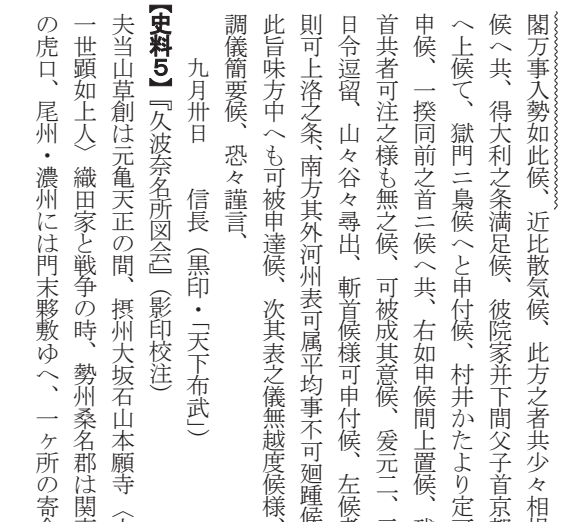
以幸便申候、御文を細々ニ御門徒へ聴聞させられ候へく候、肝要にて候、さてハ御門徒衆寄合／＼後生之大事を我々の家々にても無其憚候者、仏法之次第を申出され、つねに談合候へと御門徒中へ御催促あるへく候、願照寺（願証寺）ニ此方滞留之間物語仕候、御同心候者可被難有候、第一ハ御文之通をおの／＼講談候者、必々仏法之儀可有繁昌候事勿論候、（中略）

六月十九日　　蓮淳（花押）

野寺御房

勝万寺殿

【図表2】願証寺系図




【史料4】織田信長黒印状（『愛知県史』資料編織豊1）

此表之様子先書申尽候、仍長島院家・同一揆等種々令侘言候間、可扶一命候処、色々様々物好仕候条、昨朝相破候き、然而大略可崩出之躰候を、我等相越見及候て、昨日〈廿九日未剋〉少々乗入候、如案船にて罷出候条、悉討果候、彼院家并下間父子、平尾坊主父子三人、是等者船ニ籠居候を捜出、於目前刎首候、相紛逃延候者共、自方々殺之首到来候、連々如申根切迄候、一揆蜂起之条退治事、信長非為一人、併為天下候条、閣万事入勢如此候、近比散気候、此方之者共少々相損候へ共、得大利之条満足候、彼院家并下間父子首京都へ上候て、獄門ニ梟候へと申付候、村井かたより定可申候、一揆同前之首ニ候へ共、右如申候間上置候、残首共者可注之様も無之候、可被成其意候、爰元ニ、三日令逗留、山々谷々尋出、斬首候様可申付候、左候者則可上洛之条、南方其外河州表可属平均事不可廻踵候、此旨味方中へも可被申達候、次其表之儀無越度候様、調儀簡要候、恐々謹言、

九月卅日　信長（黒印・「天下布武」）

【史料5】『久波奈名所図会』（影印校注）

夫当山草創は元亀天正の間、摂州大坂石山本願寺〈十一世顕如上人〉織田家と戦争の時、勢州桑名郡は関東の虎口、尾州・濃州には門末夥敷ゆへ、一ヶ所の寄合所を構へ、御加勢の評議所とせり〈其比今寺といふ、今の地より西北に当る〉、其中に於て〈法泉寺・西勝寺〉は尤魁首たる寺なり、慶長年中東西分派の後、東派に属す、信乗院〈教如上人光寿〉の嫡女長姫君、初め花山院〈宰相忠長卿〉へ嫁し玉い二子あり、〈嫡男東叡山慈源大師の後跡久遠寿院准三后公海と云、二男は野々宮大納言定早卿と云、後本願寺へ帰り、法体して教証院如頓禅尼といふ、〈今尚寺附の印形長の字用ゆ、俗にお長判といふ紋所も長の字也〉、時に桑名今寺に住職なき故、本山へ願ひ出る所、教証院殿下向あり、住職し玉ふ、寺を寿量院といふ、代々連枝にて相続す、恵浄院〈琢恵上人瑛晶法橋〉の代、慶安二年本統寺と改む、（中略）恵浄院殿遷化の後は輪番所となれり、尾・濃・勢二百余ヶ寺の触頭なり、〈末寺の内、中古御免の裏書には寿量院門徒とあり〉

寺中　仏乗寺　旧号法敬坊裏門の外にあり、北向本尊阿弥陀如来聖徳太子作　（中略）

西福寺　表門外北側にあり、南向本尊阿弥陀如来恵心僧都作、当寺は御連枝入院の時、京都小川の西福寺の中より随従し来れりとなり、

覚専坊　同所南側にあり、北向本尊阿弥陀如来安阿弥作

三ヶ寺共に本山役僧の列座なり、当掛所附の役僧は、上の輪長願寺、西汰上了厳寺、東方村専明寺、安永村晴雲寺、柿村西光寺、鍋屋町明円寺、六ヶ寺月次法会不闕に出勤す

当山の方境には種々の雑説あり、略之、慶長年中今寺建立の後、本多侯より今の地を拝領あり〈坂手山縁起に詳なり桑名名勝志に見へたり〉、其後、寺地狭小なる故、法泉寺海崎の旧跡并町家の持地を買取り、惣合して今の境内となりし也、

真宗寺旧跡　今詳ならず、本統寺近辺なりと申伝へり、

今濃州高須にあり、東本願寺末なり、桑名町家に真宗寺門徒の名残れり、東本願寺教如上人免許の御本尊裏書に桑名真宗寺門徒何某とあり、慶長元和以後濃州へ移せしなるへし、彼地にて今尚三崎山真宗寺といふ、

法泉寺旧跡　本統寺境内にかゝれりといふ、慶長年中今寺建立の時、海崎の寺地を今寺の内に属し、法泉寺は香取村へ引しとなり、長嶋記云、杉江村加藤孫兵衛か今の屋敷は安田空明か古屋敷也と云々、空明は法泉寺の中興なり、神君に御味方申候、後代に百石の御朱印を賜ふ、走井山空明横鎗の下に詳なり、往古長島并当所に寺基存せしなり、

【史料6】真宗寺所蔵法宝物裏書（『海津町史』史料編2）

〔慶長四年（1599）証如影像裏書〕

本願寺釈教如（花押）
慶長四暦 亥 六月八日
勢州益田庄桑名三崎
法正坊常住物也

証如上人真影

〔慶長十年（1605）親鸞影像裏書〕

大谷本願寺釈教如（花押）
慶長十乙 季十二月□日
勢州桑名郡益田
御崎真宗寺常住物也

本願寺親鸞聖人御影　願主釈正雲

# プロフィール

**播磨良紀（はりま　よしのり）　中京大学文学部教授**

大阪府出身。関西大学大学院文学研究科後期課程単位取得退学。
四日市大学環境情報学部教授などを経て現職。
主要論文・著書

「豊臣秀長と豊臣政権」『織豊期の政治構造』吉川弘文館　2000年
「織豊期の生活文化」『天下統一と朝鮮侵略（日本の時代史13）』吉川弘文館　2003年
「織田信長の長島一向一揆攻めと「根切」」『戦国期の真宗と一向一揆』吉川弘文館　2010年
共著『四日市市史』第17巻　通史編近世　四日市市　1999年
共著『多度町史』資料編２近世　多度町　2004年　ほか

**藤田達生（ふじた　たつお）　三重大学教育学部教授**

愛媛県出身。神戸大学大学院博士課程修了。
三重大学教育学部助教授などを経て現職。
主要論文・著書

『日本中・近世移行期の地域構造』校倉書房　　2000年
『日本近世国家成立史の研究』校倉書房　　2001年
『謎とき本能寺の変』講談社現代新書　　2003年
『秀吉神話をくつがえす』講談社現代新書　2007年
『秀吉と海賊大名』中公新書　2012年
『天下統一』中公新書　2014年　ほか

**伊藤裕偉（いとう　ひろひと）　三重県埋蔵文化財センター主幹**

三重県出身。三重大学大学院人文社会科学研究科修了。
主要論文・著書

『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院　2007年
「「都市」の相対性、あるいはその「うち」と「そと」」『中世都市研究　13　都市をつなぐ』新人物往来社　2007年
『聖地熊野の舞台裏－地域を支えた中世の人々－（高志書院選書７）』高志書院　2011年
「中世末期南伊勢の板碑」『ふびと』 65号　三重大学歴史研究会　2014年
「伊勢湾・熊野灘沿岸部の伊豆石製品と近世太平洋海運」『地域社会における「藩」の刻印－津・伊賀上野と藤堂藩－』清文堂出版　2014年　ほか

**安藤弥（あんどう　わたる）　同朋大学文学部准教授**

愛知県出身。大谷大学大学院文学研究科博士後期課程修了。
同朋大学文学部専任講師を経て現職。
主要論文・著書

「戦国期宗教勢力論」『室町・戦国期研究を読みなおす』思文閣出版　中世後期研究会　2007年
「一向一揆研究の現状と課題」『戦国期の真宗と一向一揆』吉川弘文館　2010年
共著『誰も書かなかった親鸞－伝絵の真実－』法蔵館　2010年
「東海地域における真宗勢力の展開」『年報中世史研究』３８号　中世研究会　2013年
共著『教如と東西本願寺』法蔵館　2013年　ほか

**山本浩樹（やまもと　ひろき）　龍谷大学文学部准教授**
岐阜県出身。広島大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学。
岐阜県工業高等専門学校教授を経て現職。
主要論文・著書
『戦争の日本史12　西国の戦国合戦』吉川弘文館　2007年
「小牧・長久手の戦いと在地社会の動向」『小牧・長久手の戦いの構造』岩田書院　2006年
「織豊期における濃尾国境地域」『織豊期研究』第10号　織豊期研究会　2008年
「戦国時代の木曽川筋」『木曽川学研究』第8号　木曽川学研究協議会　2011年
「濃尾地域における近世社会成立過程の基礎的研究(1)(2)」『岐阜工業高等専門学校紀要 』47号・48号　2012・2013年　ほか

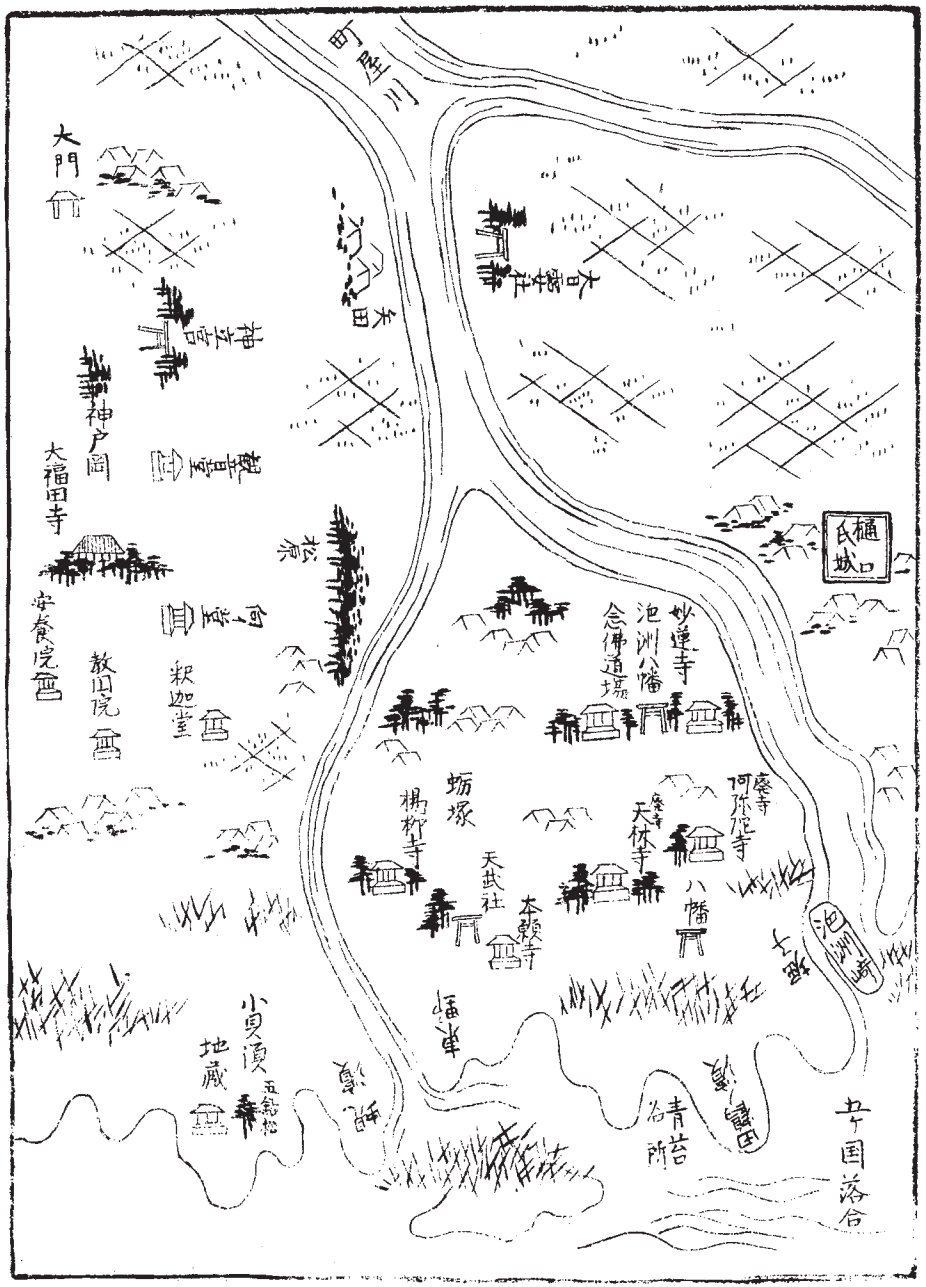
# 参考資料

「久波奈名所図会」
「桑名市域城館位置図」
「関連年表」

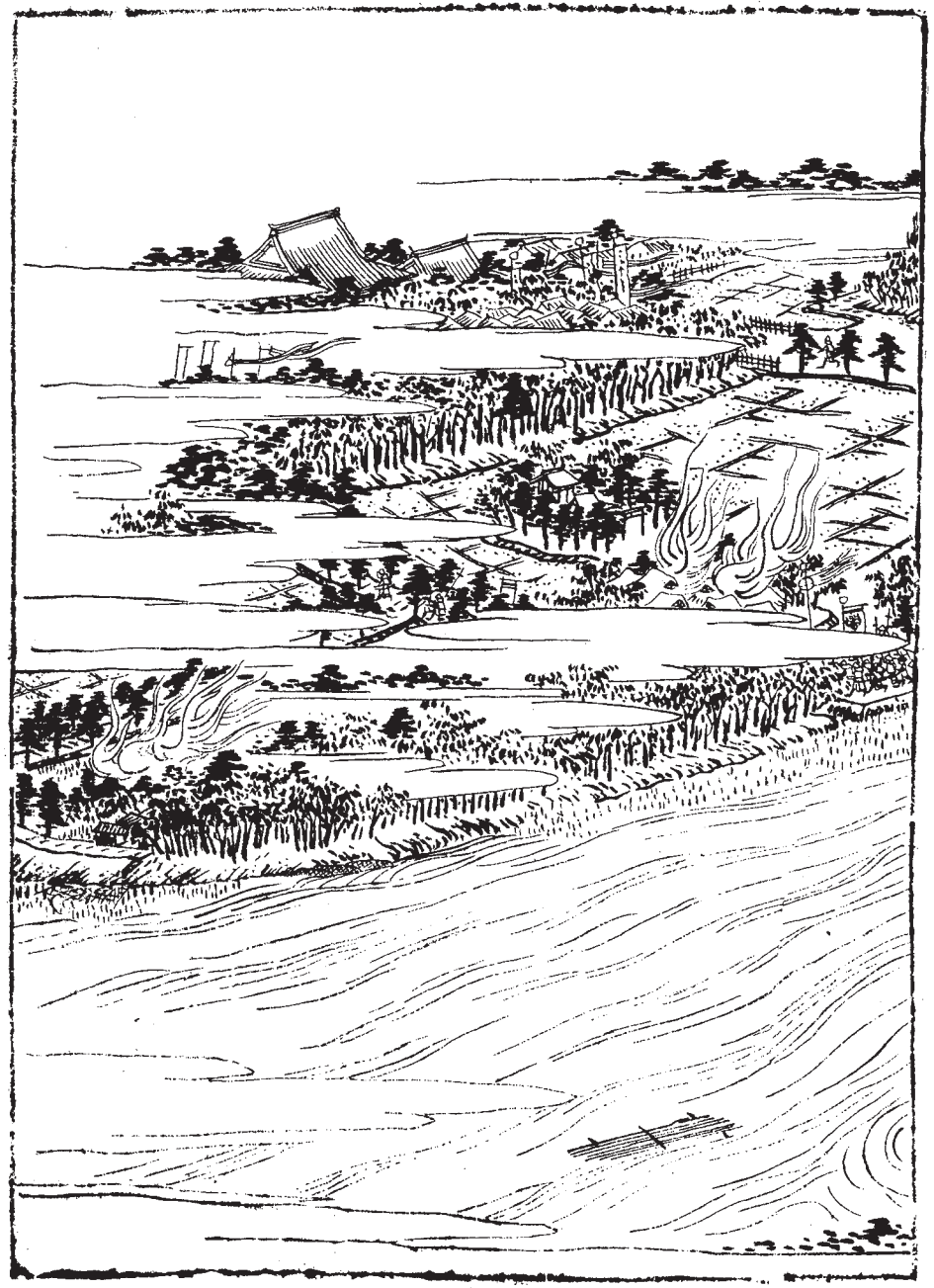
「久波奈名所図会」（桑名市指定文化財：長円寺所蔵）

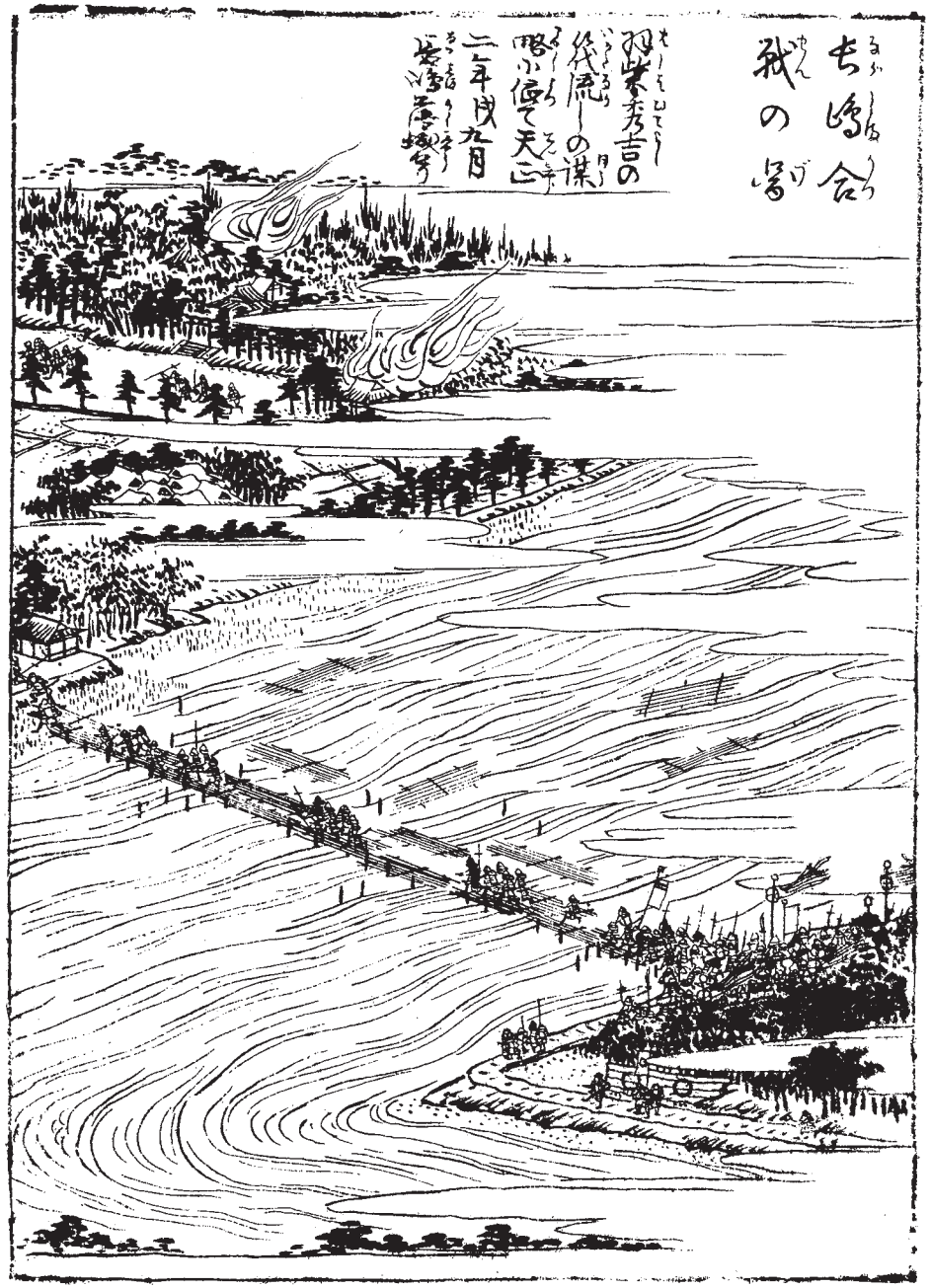
編者は長円寺の学僧魯縞庵義道で、挿絵は工藤麟溪、内容は桑名の名所、霊跡、神社、仏閣、風俗、行事、その他を京都の秋里籬島の著した諸国名所図会本に倣って作ったもので、享和2年（1802）8月完稿、前後5年間の労作である。

この中に、「益田庄桑名三崎天正元亀以前之図」（上巻）があり、桑名城・城下町建設以前の状況が描かれている。そのほか、本シンポジウムに関連する「長嶋合戦の図」「柳堂法盛寺」（下巻）や小牧・長久手の戦いに伴う「両将和睦の図」「安田空明横鎗図」（中巻）などが描かれている。



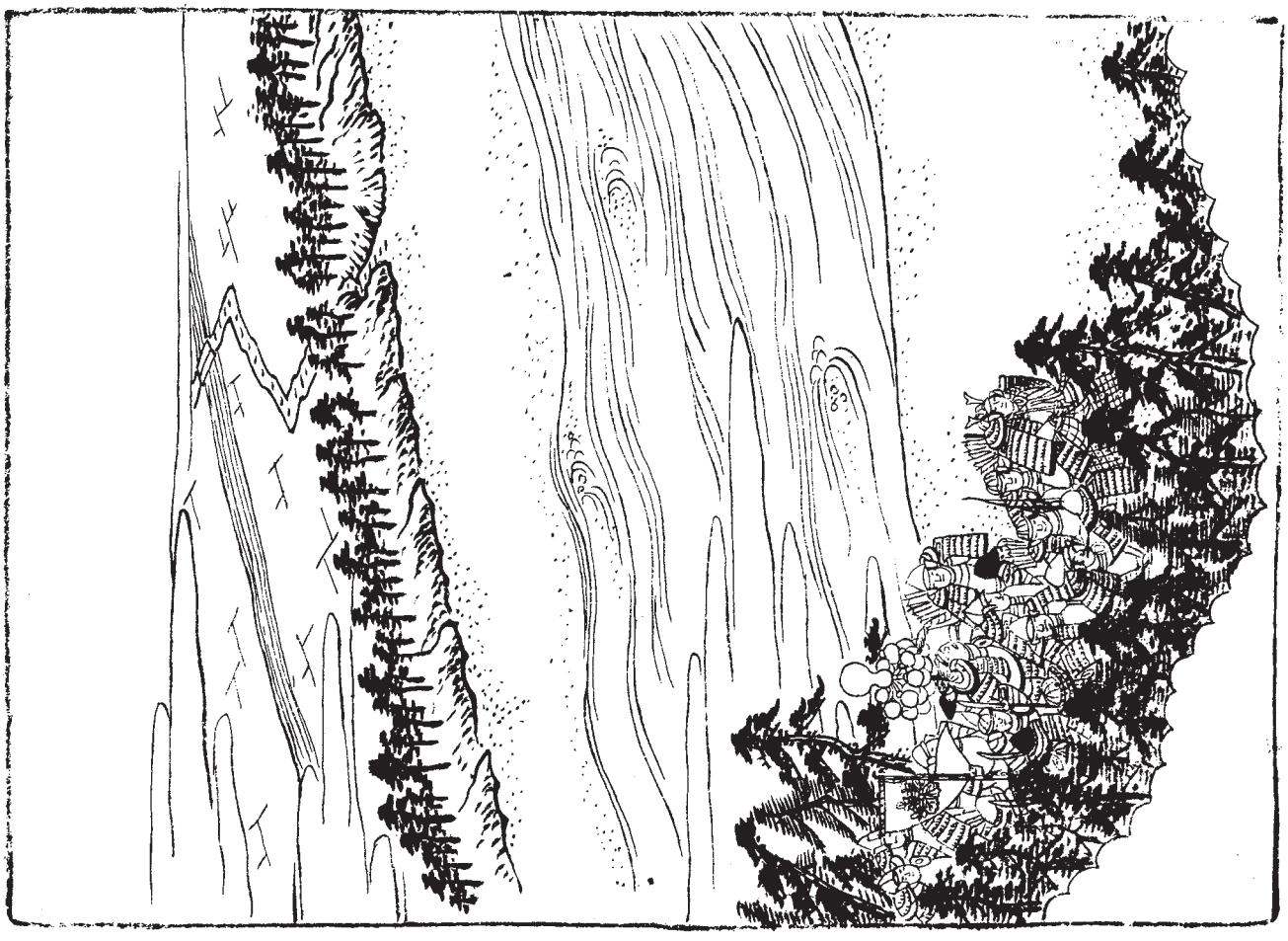
益田庄桑谷三崎
天正元亀以前之圖





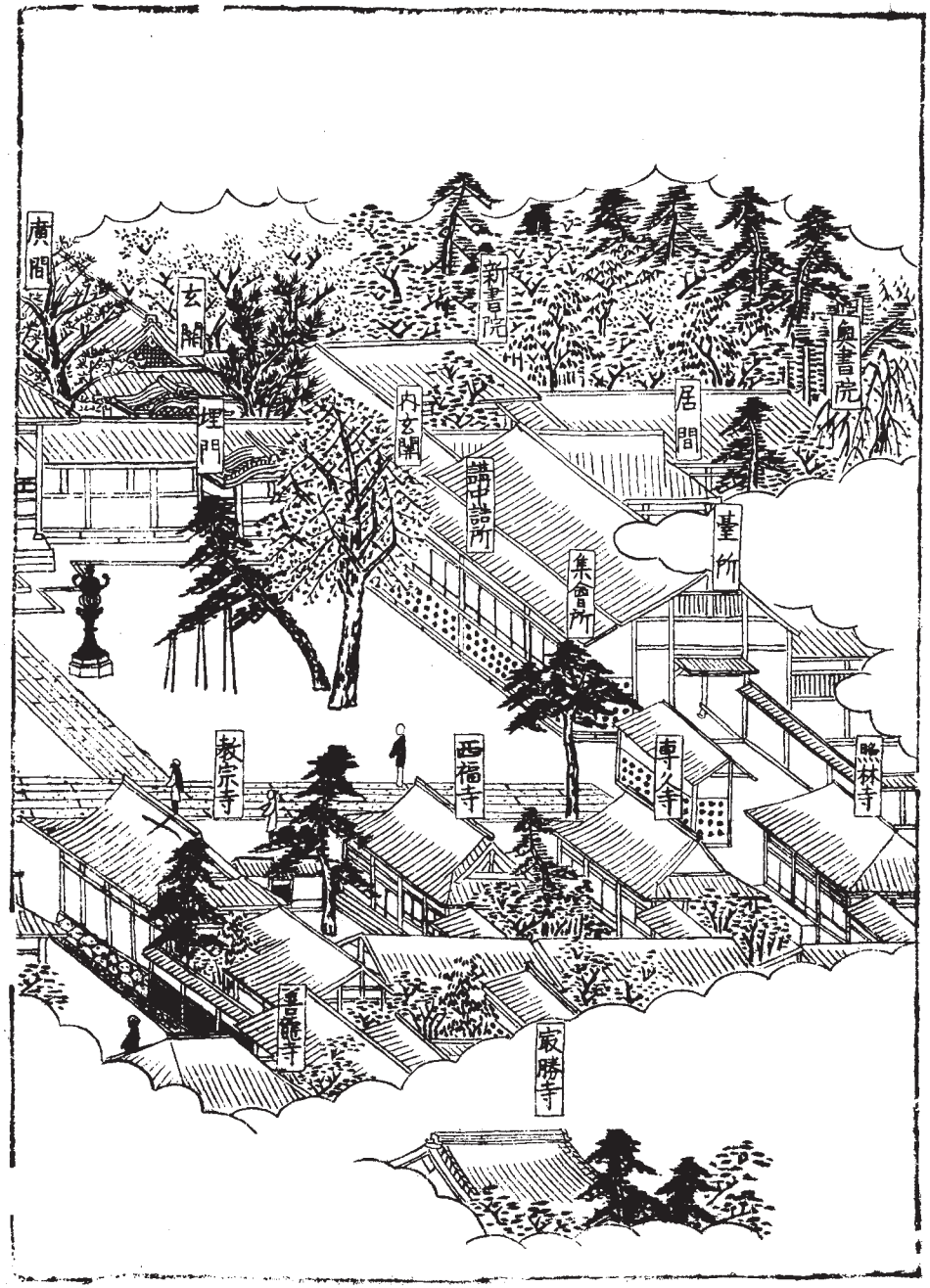
長崎合戦の場
羽柴秀吉の
後流しの謀
略小倉で天正
二年戌九月

陸奥の海



安田空明横鎗圖

柳堂
法盛寺
本堂
經堂
花部屋
佛供所
鐘樓
表門
茶所
手洗水
鼓樓
柳堂門前
萱町通


廣間
玄關
新書院
奥書院
埋門
内玄關
講中詰所
居間
臺所
集會所
教宗寺
西福寺
専久寺
照林寺
喜龍寺
最勝寺

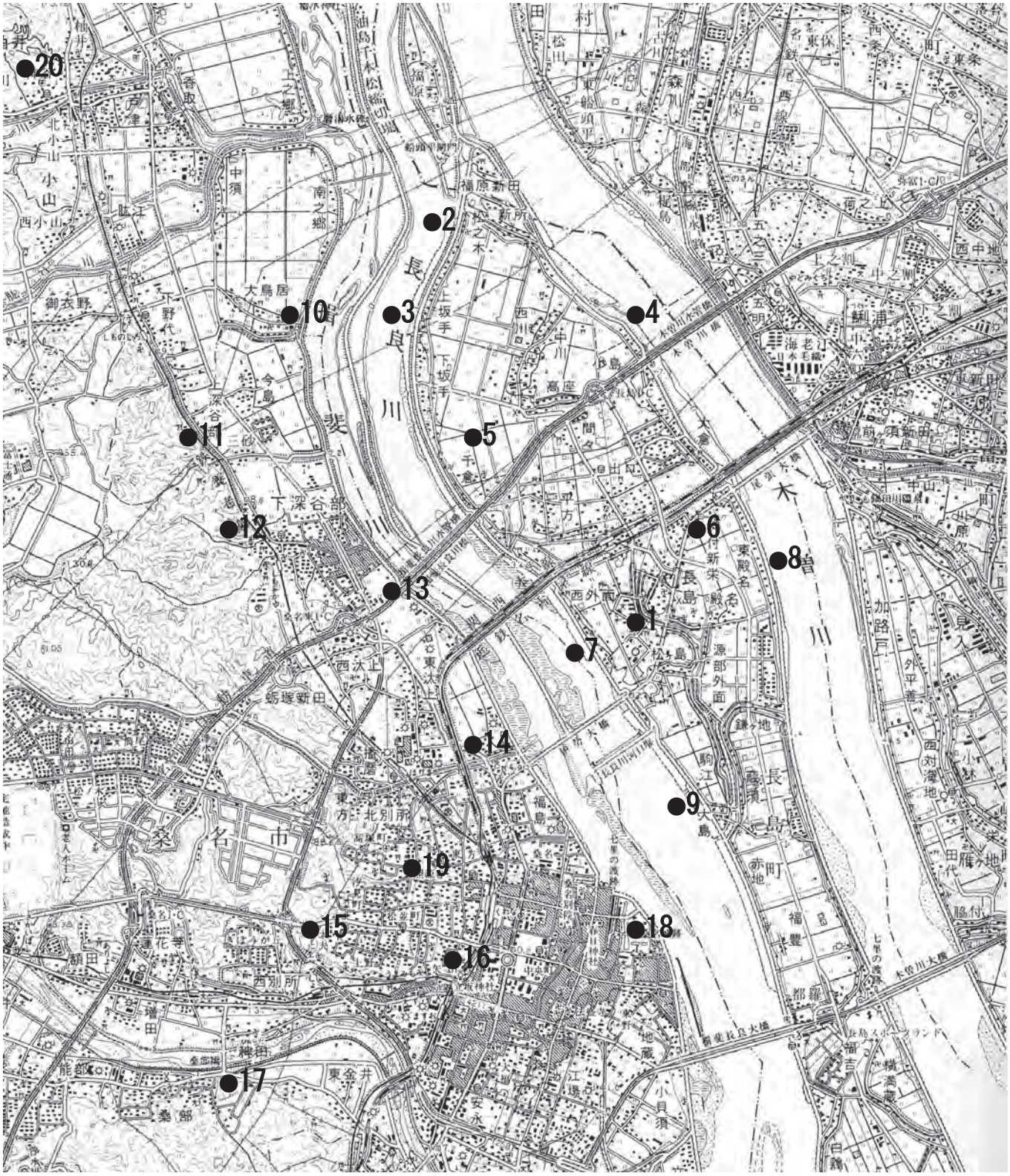
桑名市内城跡位置図

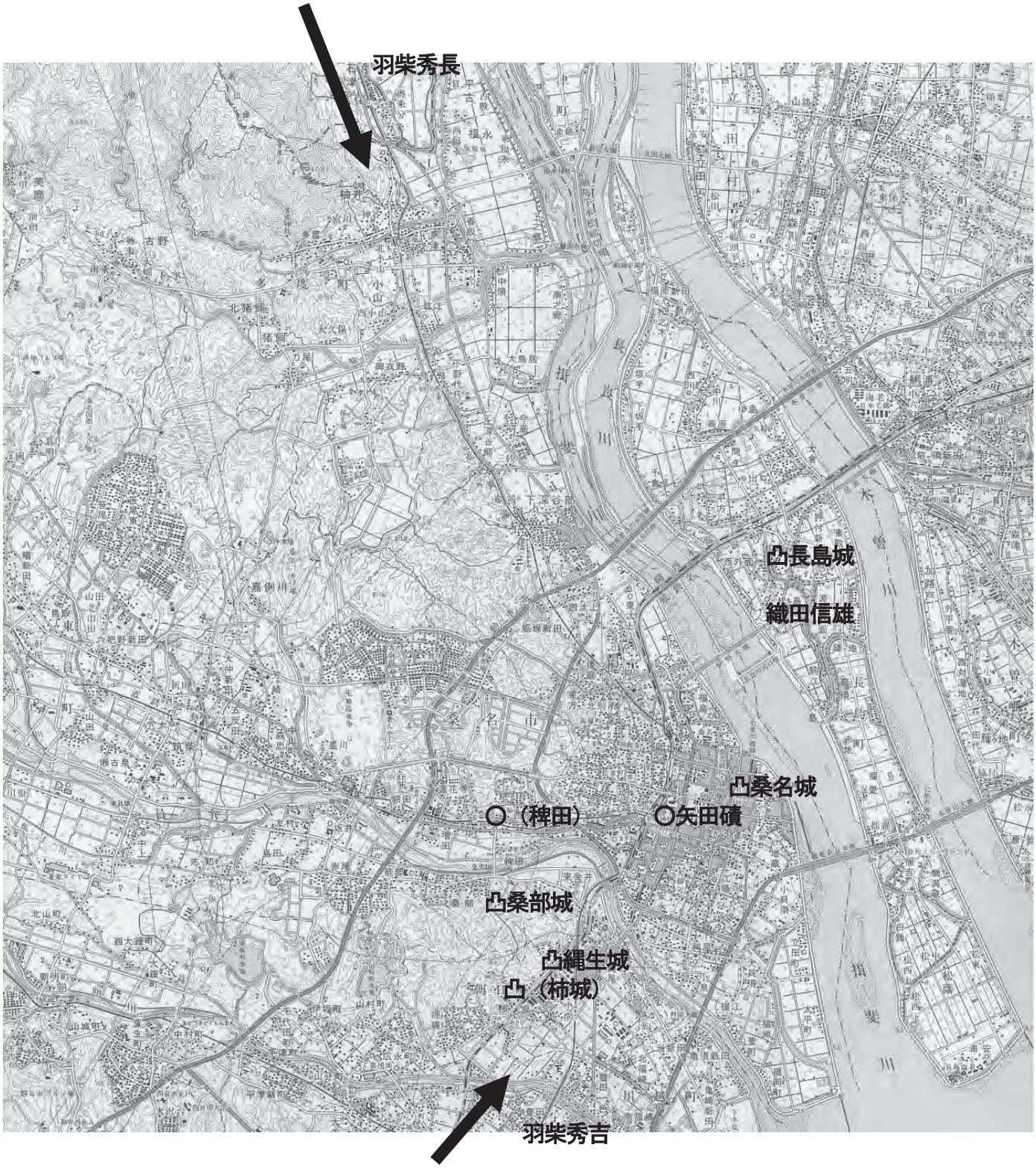
1　長島城跡（ながしまじょうあと）、2　松ノ木砦跡（まつのきとりであと）、3　願証寺跡（がんしょうじあと）、4　篠橋城跡（しのはせじょうあと）、

5 竹橋砦跡（たけばしとりであと）、6 押付砦跡（おしつけとりであと）、7　小田御崎砦跡（おだみさきとりであと）、 8 殿名砦跡（とのめとりであと）、9 大島城跡（おおしまじょうあと）、

10 大鳥居城跡（おおとりいじょうあと）、11　堺城跡（さかいじょうあと）、 12　北廻城跡（きたはざまじょうあと）、13 柳ヶ島城跡（やながしまじょうあと）、14 中江城跡（なかえじょうあと）、

15 白山城跡（はくさんじょうあと） 16　矢田城跡（やだじょうあと）、17　桑部城跡（くわべじょうあと）、18 桑名東城（くわなひがしじょう）、19尾畑城跡（おばたじょうあと） 20柚井城跡（ゆいじょうあと）






小牧・長久手の戦いにおける桑名周辺位置図

# シンポジウム「戦国・織豊期@桑名」年表

| 西暦 | 和暦 | 月日 | 出来事 |
|---|---|---|---|
| 1475・76 | 文明７・８ | | 伊勢国香取浄賢の子安田主計助、秘事法門を受ける |
| 1489 | 長享３ | 6月4日 | 本願寺蓮如、阿弥陀如来絵像を香取荘辰田門徒了道に授ける |
| 1493 | 明応２ | | 本願寺蓮如、伊勢の空賢（法泉寺８世）に教えを説く |
| 1497 | 明応６ | | 本願寺蓮如十三子蓮淳、長島願証寺に入寺 |
| 1499 | 明応８ | 正月28日 | 本願寺実如、阿弥陀如来絵像を空賢門徒浄順（朝明郡鵜）に授ける |
| 1501 | 明応10 | 正月28日 | 本願寺実如、親鸞聖人御影像を香取郷杉江願証寺に授ける |
| 1511 | 永正８ | 3月20日 | 内宮一禰宜荒木田守則、長野尹藤に桑名の住人の還住を許可するよう要請 |
| | | 5月3日 | 内宮一禰宜荒木田守則、再度長野尹藤に桑名の住人の還住を許可するよう要請 |
| 1526 | 大永６ | | 連歌師宗長、桑名を訪れ「みなとのひろさ、五・六町、寺々家々数千軒」と記す |
| 1533 | 天文２ | 雪月日 | 多度山衆僧次第に多度神宮寺が７０坊３００余人の勢力を有するとある |
| 1536 | 天文５ | | 本願寺証如、阿弥陀如来絵像を香取荘長嶋の幸智らに授ける |
| | | 10月18・27日 | 長野氏、本願寺証如に梅戸氏（六角氏一族）の桑名入部を報じる |
| 1537 | 天文６ | 3月20日 | 本願寺証如、実如上人御影像を香取荘長嶋願証寺の某に授ける |
| | | 6月 | 柳堂阿弥陀寺（法盛寺）、本願寺の御堂日番を勤める |
| 1538 | 天文７ | 2月2日 | 証如上人日記に法盛寺の名が初めて登場する（この前後に寺名変更か？） |
| | | 12月13・16日 | 長野氏と六角氏により分割統治となる |
| 1539 | 天文８ | 4月5日 | 伊勢国香取の拝江氏（奉公衆３番）が上洛 |
| | | 6月22日 | 本願寺証如、阿弥陀如来絵像を香取荘長嶋願証寺の証恵に授ける |
| | | 6月23日 | 伊勢国大福田寺、本願寺末寺願証寺門徒内田三郎の押領を訴える |
| 1540 | 天文９ | 10月28日 | 六角氏、北伊勢発向 |
| 1542 | 天文11 | 5月2日 | 小串弥三、本願寺証如に安田空誓を折檻したことを伝う |
| 1543 | 天文12 | 正月28日 | 小串弥三、本願寺証如に長男（顕如）誕生の祝賀を表す |
| | | 正月29日 | 本願寺証如、小串弥三に返礼を遣わす |
| | | 5月 | 村正、春日神社に太刀を奉納す |
| | | 12月27日 | 室町幕府、桑名郡内太神宮領に対する香取権少輔の押領を停める |
| 1548 | 天文17 | 5月8日 | 伊勢国人拝江兵部大輔、本願寺証如と面会す |
| 1553 | 天文22 | 9月 | 村正、神館神社に太刀・剣を奉納す |
| 1558 | 永禄元 | | 近江国の枝村商人と保内商人の間で桑名における紙の取引で争論がおきる |
| | | | 枝村商人が桑名が「十楽の津」であると主張し、自由な商売を要求 |
| 1560 | 永禄３ | 9月16日 | 枝村商人の主張が退けられる |
| 1564 | 永禄７ | 8月16日 | 僧頼任、伊勢国一宮多度山法雲寺にて、「求聞持腰袋抄」を書写す |
| 1567 | 永禄10 | 8月15日 | 美濃の斎藤龍興、織田信長に追われ長島へ退散 |
| | | 8月 | 里村紹巴、津島から桑名へ渡る予定であったが、信長の長島成敗により、知多へ迂回 |
| | | | 織田信長、北伊勢へ侵攻、長島を除く大半が信長領となる |
| 1569 | 永禄12 | 3月3日 | 多度社祠官小串重元、吉田兼右へ別火について問う |
| | | 12月18日 | 伊藤豊右衛門実重・右近丞実元、信長の奉行として山城阿弥陀寺へ書状を出す |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1570 | 元亀元 | 2月 | 願証寺を中心とした本願寺門徒衆が、伊藤氏を放逐し長島城を占拠したとされる |
| | | 11月21日 | 長島の一揆勢、尾張国小木江城を攻め、信長の弟信興を自刃に追い込む |
| 1571 | 元亀２ | 5月 | 桑名郡の諸社、多度権現に祈願し織田信長を調伏する |
| | | 5月12日 | 信長、三方から長島を攻撃す |
| | | 5月16日 | 信長、大館上総介に長島の一揆勢が詫言を言ってきたので赦免すると伝える |
| | | 5月16日 | 退却するところを美濃国太田付近で一揆勢の攻撃を受け、氏家卜全戦死 |
| 1573 | 元亀４ | 7月8日 | 本願寺顕如、阿弥陀如来絵像を香取荘長嶋の門徒に授ける |
| | 天正元 | 9月20日 | 織田信雄（北畠具豊）、大湊へ長島へ出陣するように命じる |
| | | 9月24日 | 北伊勢に大垣から出馬 |
| | | 9月25日 | 美濃国太田（南濃町）に着陣 |
| | | 9月26日 | 近江から八風峠を越え、佐久間信盛・羽柴秀吉らが西別所を攻める |
| | | | 柴田勝家・滝川一益、堺城（上深谷）の片岡を攻める |
| | | 10月6日 | 深谷部の近藤の居城（北廻城跡）を攻める |
| | | 10月8日 | 信長、東別所（北別所か？）に着陣 |
| | | | 矢田城を普請し、滝川一益を入れる。 |
| | | 10月13日 | 北畠具房、桑名から帰港した大湊衆をとがめ、出船を命じる |
| | | 10月25日 | 兵を納め大垣へ帰陣する途中、再び多芸山（養老山地）から一揆勢に攻められる |
| | | 10月26日 | 岐阜に帰陣 |
| 1574 | 天正２ | 7月13日 | 長島を成敗するために出陣、陸路は東西北方向から、そして船による攻撃も行う |
| | | 7月14日 | 信長、尾張国五明（弥富市）に着陣 |
| | | 7月15日 | 一揆勢、妻子なども連れ長島に逃げ入る。信長、伊勢国殿名に移る |
| | | | 篠橋・大鳥居・押付・加路戸・大島を攻める、大鉄砲を以って塀・櫓を打ち崩す |
| | | | 島中の男女貴賤の数知れず、長島・屋長島・中江に逃げ入り、過半餓死す |
| | | 8月3日 | 大鳥居落城、男女千人ばかり切り捨てられる |
| | | 8月12日 | 篠橋落城、逃げ出すものは長島に追いやる |
| | | 9月29日 | 中江・屋長島落城、両城を幾重にも囲み２万人ばかり焼き籠められる |
| | | 9月晦日 | 長島落城、長島一向一揆終結 |
| | | | 滝川一益が長島を居城とし、北伊勢５郡を支配 |
| 1576 | 天正４ | 正月30日 | 信長、大多和・拝江・世古らに長島城普請に協力するよう命じる |
| 1579 | 天正７ | 10月10日 | 猪飼・小山・戸津から伊勢神宮外宮に神税が上納される |
| 1582 | 天正10 | 6月2日 | 本能寺の変、伊藤彦作（桑名伊藤氏の一族）戦死す |
| | | 9月 | 伊勢神宮外宮から猪飼御厨に徴税の督促が出される |
| | | 10月3日 | 本願寺顕如、願主賢智に対して香取郷惣道場の阿弥陀如来絵像を授ける（裏表紙写真） |
| | | 10月6日 | 顕如、香取郷長島村松ヶ島の願主釈性□に阿弥陀如来絵像を授ける |
| 1583 | 天正11 | 2月17日 | 賤ヶ嶽の戦いの中、柴田方であった滝川を秀吉が攻め、桑名の外構えまで放火 |
| | | 7月27日 | 滝川、長島城を退去 |
| | | | 尾張・伊勢・伊賀が織田信雄の領地となり、長島が居城となる |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1584 | 天正12 | 3月6日 | 信雄、秀吉に通じる家老３人を長島城呼び出し殺害、小牧・長久手の戦いが始まる |
| | | 6月16日 | 秀吉方の滝川一益が蟹江城を攻略 |
| | | 7月3日 | 信雄・家康が蟹江城を奪還 |
| | | 8月19日 | 信雄、駒野城（南濃町）を守る高木氏に、法泉寺空明らを加勢に派遣したことを伝う |
| | | 10月23日 | 信雄、法泉寺・高木氏に羽柴秀吉の北伊勢出陣の情報を伝う |
| | | 11月6・7日 | 秀吉、北伊勢を攻める |
| | | 11月10日 | 秀吉、町屋川まで攻める |
| | | 11月15日 | 桑名矢田川原にて和睦 |
| 1585 | 天正13 | 11月29日 | 天正大地震により長島城大破 |
| | | | 信雄は居城を清須へ移す（この時、桑名・長島の住民も伴う） |
| | | | 信雄分限帳に家臣の所領として多くの現市域の地名が記される |
| 1586 | 天正14 | 7月23日 | 信雄、高木貞利に桑名郡内柚井・多度・戸津・下肱江・上肱江を与える |
| | | 7月24日 | 信雄、井村庄兵衛に桑名郡内猪飼郷を与える |
| 1590 | 天正18 | 4月 | 北条氏小田原攻めにあたり桑名から駿河国三枚橋へ兵糧などを船で運ぶ |
| | | 7月 | 北条氏直、高野山への移送により熱田から桑名へ渡る |
| | | | 織田信雄改易（長島は豊臣秀次領、桑名は豊臣秀吉直轄領となる） |
| 1591 | 天正19カ | 12月3日 | 秀吉、天野周防守雄光に美濃国から積み出した米を入れる蔵を桑名に作るよう命じる |
| 1594 | 文禄３ | | 太閤検地、長島は尾張国として行われる |
| | | 3月15日 | 本願寺教如、伊勢国の坊主衆・門徒衆中に御影堂建立の援助を請う |
| 1595 | 文禄４ | 7月 | 一柳右近が神戸城から天守閣を移築したとされる |
| | | 8月21日 | 秀次事件、秀次の妻子も殺される、この中に側室であった大島新左衛門の娘もいた |
| 1599 | 慶長４ | 5月28日 | 本願寺准如、桑名郡香取荘辰田直参中の蓮如絵像の修復にあたり裏書を付す |
| 1600 | 慶長５ | 9月 | 関ヶ原の戦い |

裏表紙写真：阿弥陀如来絵像（正覚寺所蔵・桑名市多度町上之郷）

シンポジウム「戦国・織豊期@桑名」
資料集

発　行　　桑名市・桑名市教育委員会
〒511-8601　三重県桑名市中央町2－37
印　刷　　有限会社長瀬印刷所
〒511-0064　三重県桑名市新築町10
発行日　　平成26年（2014）12月7日

新桑名市誕生
10周年記念

# シンポジウム
# 「戦国・織豊期@桑名」
# 資料集

このシンポジウムは、全国モーターボート競走施行者協議会からの拠出金を受けて実施するものです。